

CPIS-Report-2013/02/001 (Review)

総合研究大学院大学学生セミナー ―歴史と現在―

学融合推進センター 桂 勲・岩瀬峰代

題：総合研究大学院大学学生セミナー—歴史と現在—
CPIS-Report-2013/02/001 (Review)

著者：桂 勲・岩瀬峰代

発行日：2013 年2月18日

発行：総合研究大学院大学学融合推進センター

無断権写・転載禁止 Printed in Japan

=目次=

| | |
|-------------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| A. 学生セミナーの歴史 | |
| 1. はじめに | 2 |
| 2. 学生セミナーの概観：規則、実施時期・場所、実施体制 | 2 |
| 3. 学生セミナーの変遷：内容と企画・実施の実際 | 3 |
| 4. おわりに | 7 |
| B. 学生セミナー（平成 24 年度現在）の概要 | |
| 1. 事業目的 | 9 |
| 2. 事業概要 | 9 |
| 3. 参加学生の意識 | 10 |
| 4. 学生セミナー実行委員会 | 11 |
| 5. 今後の課題と改善案 | 12 |
| 参考文献一覧 | 14 |
| <資料> | |
| 資料Ⅰ. 総研大年表（学生セミナー関連） | 15 |
| 資料Ⅱ. 学生セミナーの規則（実施要項） | 18 |
| 資料Ⅲ. 各年度の学生セミナー実施状況 | 21 |
| 資料Ⅳ. アンケート集計 | 37 |
| 資料Ⅴ. 学生セミナー実行委員数の推移 | 44 |
| 資料Ⅵ. ディスカッション用資料の例 | 46 |
| 資料Ⅶ. 学生セミナー実行委員会の概要と目的（平成 23 年度） | 48 |
| 資料Ⅷ. 学生セミナー実施報告（業務的観点） | 50 |
| Ⅷ-1. 平成 16 年度 教員・事務の業務振り分けについて | |
| Ⅷ-2. 平成 23～24 年度 業務フローおよび教職員の連携について | |

はじめに

新しい学術研究分野を開拓する創造性豊かで、視野の広い研究者育成が総合研究大学院大学の理念である。この実現に向けて、基盤機関の研究資源を活用した専門的な大学院教育を行いつつ、基盤機関との連携による「研究者育成のための総合教育」を進めてきている。その中でも、学生セミナーおよび学生セミナー実行委員活動は学際性および人間の総合性への志向を高めることを目的に行われている。

しかしながら、学生セミナーは創立の翌年来 20 年以上実施していることもあり、現行の中期目標における位置づけや大学院教育の質保証といった観点からの検討を行う必要性がでてきた。そこで、高畑学長および長野副学長の要請を受け、学生セミナーの歴史については桂先生が、実施概要と資料については岩瀬が取りまとめることになった。

本記録において、学生セミナーの歴史は「規則、実施体制」および「企画内容」についてその変遷を辿り、実施概要については学生セミナーにおける教員、学生そして事業を支援する事務職員の役割を中心として記載した。また、これまでの実施内容、規則等については資料として収載している。

この記録が高畑学長の推し進めている「総研大らしい」教育をさらに充実させる一助となることを心より願っている。

また、この記録を作成するにあたり、初代学長長倉先生、2 代目学長廣田先生、3 代目学長小平先生に学生セミナーについて話を伺う機会を得た。それぞれから総研大の教育に対する強い期待と情熱を持って本事業に取り組みされたこと、そして各専攻の教員との連携なしでは実施できない教育プログラムであったことをお聞きすることができた。これについては、別に報告させていただきたいと思っている。

なお、資料収集については事務職員の方々にご協力を頂いた。ご協力いただいたすべての方に、心から感謝申し上げます。

平成 25 年 2 月 18 日

総合研究大学院大学
学融合推進センター
講師 岩瀬峰代

A. 学生セミナーの歴史

1. はじめに

学生セミナーは平成2年度、すなわち総研大に最初の学生が入学した翌年に始まり、それ以降、毎年、春に開催されている(資料Ⅰの年表を参照)。また、平成16年度からは秋にも開催されるようになった。学生セミナーが始まった理由について、直接の資料は見つかっていないが、長倉初代学長の理想、すなわち「総研大では、先端的な研究者がポスドクや大学院生と一緒に新しい分野を作る」という考えを実現させる手段の1つだったと推察される。学生セミナー開始1年後(平成3年9月)にできた実施要項では、その目的は「本学の学生が主体となって、作成する計画に基づき、各研究科・専攻に共通する課題について、学生及び指導教官等による意見発表、討議等を行い、相互の理解を深めると共に、幅広い視野を得るために、毎年度開講する。」となっている。これは、その後、平成16年に裁定された新しい実施要項でも、内容は同じである(資料Ⅱ参照)。この内容、すなわち(1)学生が企画に参加、(2)研究科に共通する課題、(3)学生・指導教員等による発表・討議、(4)広い視野の習得、(5)学生・教員間の交流、は学生セミナーの歴史を通して、基本線としては変わっていない。その一方で、強調される点はかなり変化して来た。本稿では、その歴史をたどり、今後の学生セミナーを考える参考に供したい。

2. 学生セミナーの概観：規則、実施時期・場所、実施体制

学生セミナーの目的は上に述べたので、規則、時期と場所、実施体制について述べる。

(規則)

以下の3つの規則がある。(ii)と(iii)は資料Ⅱとして末尾に添付する。(i)は、(ii)の中で引用されているが未発見。

(i) 学生セミナー委員会設置要項(平成2年4月1日学長決裁)

平成2～3年度の学生セミナーに適用

(ii) 総合研究大学院大学学生セミナー実施要項(平成3年9月19日学長決裁)

平成3年4月に教育研究交流センターが設置されたために新しい規則に変わったと思われる。

平成4～16年度前学期の学生セミナーに適用された。

(iii) 総合研究大学院大学学生セミナー実施要項(平成16年6月9日学長裁定;資料Ⅱに添付したのはH18.6.6とH20.4.1の一部改正を経た現在のもの)

平成16年4月に教育研究交流センターが廃止され、全学事業推進室が置かれて平田光司教授(平成16年度は副学長、平成17年度以降は学長補佐)が全学事業担当になったこと、平成11年度以降は主に学生の実行委員によって学生セミナーの企画が行われるようになったこと等に対応する変更と思われる。この規則は平成16年度後学期以降の学生セミナーに適用されている。(その後、部局名など、主に形式的なことは変化しているが、規則はまだ改正されていない)

(時期と場所)

平成2～6年度は、総研大本部がまだ東京工業大学長津田キャンパス内に間借りをしていたので、入学式は、平成元年の第1回を除き専攻ごとに行われていた。学生セミナーは全専攻の学生が集まる唯一の機会であり、入学式後しばらくしてから、各地の宿泊可能な施設を借りて、4～6月の適当な時期に1泊2日で行われていた。平成7年度以降は、葉山キャンパスが完成し全学の入学式が行われるようになったため、入学式に引き続いて1泊2日で総研大葉山キャンパス及びその付近の施設(湘南国際村センター、ロフォス湘南)で行われるようになった。また、平成16年度からは後学期学生セミナーが、10月の入学式に引き続いて上記の場所で行われるようになった。

(実施体制)

[規則(ii)による実施体制]

学生セミナー実施委員会が実施し、事務を事務局(年度により研究交流係または学務係)が処理する。実施委員会は、教育研究交流センターの教授と各専攻から選出された教官から成り、その委員長は教育研究交流センター長が務める。一方、実施委員会の中に各専攻から選出された学生による実行委員会をおき、学生が主体となって企画できるような体制になっている。教育研究交流センター運営委員会が実施委員会からの報告を受けてチェックする。平成11年度までは、担当専攻制度があり、全専攻の中から持ち回りで2～5の専攻が各年度の学生セミナーを担当した。

[規則(iii)による実施体制]

学長補佐(全学事業担当)の下に置かれた学生セミナー実行委員会が企画・実施し、企画事務は全学事業推進室、実施事務は葉山共通事務室が処理する。実行委員会は、学長補佐(全学事業担当)、各専攻から選出された学生、および学長補佐(全学事業担当)が必要と認めた者(実質的には全学事業推進室の教員)から成り、その委員長は学生の互選とする。運営会議が学長補佐(全学事業担当)からの報告を受けてチェックする。年に2回行われることも、この体制の開始とともに始まった。平成15年度までは学生セミナーの中の講演を「特別講義」として授業の単位を出していたが、平成16年度からは「学生セミナー」として単位になることが規則に明記された。なお、2012年7月に総合教育科目プログラム委員会ができるまでは、単位認定と成績評価は学長補佐(全学事業担当)が行っていた。

3. 学生セミナーの変遷：内容と企画・実施の実際

(平成2～3年度)

学生セミナーが始まり、その内容に関してさまざまな試みが行われた時代である。平成2年度は、講演2つの他に、担当専攻の教育・研究の紹介、9グループに分かれての討論会(テーマは学生が用意したものから選択)、4セッションに分かれ各2名の教員の意見発表と討論が行われている。平成3年度は、4つの発表に対し、それぞれ教員1名

+学生2名のコメントをあらかじめ決めておいて討論を行っている。また、文化科学研究科の紹介があり、2日目は国立民族学博物館の見学を行っている。

(平成4～10年度)

学生セミナー実施要項が制定され、教育研究交流センター(平成3年4月に設置)の教員が交代でリーダーとなり、各専攻から選出された教員・学生とともに企画をするようになった。ただし、待ち回りの担当専攻制があり、実質的には当番に当たった専攻の教員・学生が中心に企画・実施していた。内容は、3～6名の講師(過半数は学外者)による講演、講師を囲んでのディスカッション、ポスターによる専攻紹介、自由時間の討論という形式に落ち着いた。また、この他に平成9年度は学生による発表2件、平成10年度は翌年の学生セミナーについての総合討論が行われている。平成6年度までの、総研大全体の入学式がなかった時期の学生セミナーに関して、以下のような学生の感想がある。

入学式が当時まだ別々に行われていたこともあり、「総研大」という存在が自分の中にしっかりと登場したのは、入学後まもなく行われた学生セミナーだったと思います。学生セミナーで文系理系問わず多彩な専攻の方々とご一緒し、はじめて「総研大」の規模の大きさを認識したような気がします。このとき1年後の学生セミナーをまさか自分たちが運営することになるとは思ってもみませんでした。翌年がちょうど持ち回りの順番に当たったことから、何も分らないうちに、統計科学専攻、天文科学専攻のみなさんと一緒に実行委員をやることになってしまいました。それから1年間、何度となく実行委員会を開き、あれこれ議論を重ね(意見が合わないことも多々ありましたが)、翌年には何とか自分たちの目指した「学生セミナー」にたどり着くことができたように覚えています。今となっては懐かしい思い出です。総研大の特性として基盤機関が全国に分散していることもあり、さらに当時、全学が一堂に会する機会というのがほとんどなかったことから、「総研大」のアイデンティティーを感じることはこのような全学行事のおかげだったと思います。(木部剛：極域科学専攻 平成8年修了「総合研究大学院大学の思い出」「総研大十年史 一分散と総合」平成11(1999)年6月発行 p81より関連部分を抜粋)

(平成11～16年度)(平成16年度後学期学生セミナーについては後述)

平成9年度に湯川哲之教授が教育研究交流センター長に就任すると学生セミナーの検討を始め、平成10、11年度の学生セミナーの最後に行われた次年度の学生セミナーについての総合討論をもとに段階的に改革を行った。平成13年度からは平田光司教授が教育研究交流センター長になり、これをさらに発展させた。この改革については、以下のように書かれている。

各専攻から選出された教員からなる実施委員会が核となり、学生の実行委員会が実際の運営を行う。従来はテーマ設定から講師の依頼まで、実施委員会が実質的に指導した。このため、実行が容易であった半面、「学生が主体となって企画する」という点では十分なものではなかった。平成11年度までは「担当専攻」が決められており、実質的に活動する

のは担当専攻の学生、教員がほとんどという状況であった。平成 11 年度では比較文化学専攻・統計科学専攻・核融合科学専攻・極域科学専攻・遺伝学専攻が担当専攻に上がっている。平成 12 年度からは担当専攻を廃止し、学生の討議によって学生全員の協力によって計画をすすめるようになり、さらに、平成 13 年度からは、実施委員会の指導は助言を求められた場合に事実上限定されるようになった。(方向があやしくなった場合には指導する責任があったが、実際には、その必要は無かった)。

12 年度以降は、実行委員会がおおむね 6 月ころ招集され、委員長を互選、運営の方針とテーマをほぼ決定した後、いくつかの班に分かれて活動していた。連絡は主に電子メールによって行われたが、進展状況に応じて臨時的委員会も開催された。時間の割り振りも学生に任せられていたが、大体、1 日目に講演、夕食後はグループに分かれて講師を中心とするフリーディスカッション、2 日目は専攻紹介、全体討論などにあてられている。(「総研大 15 周年記念誌-第 2 ステージと法人化-」平成 16 年 11 月 12 日刊行 「第 1 節 教育研究交流センター」の記事 p71 より抜粋)

各年度の学生セミナー実施状況(資料Ⅲ)を見ると、プログラムの内容は以前と同様に講演、講師を囲んだディスカッション、専攻紹介、自由時間が中心だが、平成 15 年度は 4 名の総研大修了生、平成 16 年度前学期は 5 名の教員によるパネルディスカッションを行っていること、平成 16 年度前学期には研究者に必要なスキルとしてディベート入門の手ほどきを受けていることに変化が見られる。改革のしるしは、平成 12 年度からは学生が各年度の学生セミナーの具体的な目的を書くようになったこと(資料Ⅲ)、平成 13 年度以降は参加学生に対するアンケートを行っていること(資料Ⅳ)にも見られる。

(平成 17～18 年度)(前学期の学生セミナーについて；後学期は後述)

平成 16 年 4 月に教育研究交流センターが廃止され、学生セミナーに関して以下の変化が起こった。(1)学生セミナーの企画と実施は、全学事業担当の平田光司学長補佐(平成 16 年度は副学長)、各専攻から選出された学生、学長補佐が必要と認めた者(実質的には全学事業推進室員)が実行委員会を構成して行う。新しくできた全学事業推進室が企画事務、学務課教務係が実施事務を処理する。(2)「学生セミナー」という名前で総合教育科目の 1 つとなり、レポートを提出して合格することを条件に単位を付与する。(3)後学期にも学生セミナーを行う。(4)これらの変更に合わせて、6 月 9 日に新しい学生セミナー実施要項(資料Ⅱ)が裁定された。(5)また、各専攻に全学事業担当教員を決めて、専攻における全学事業への取組みの実態の把握に努め、全学事業担当者会議を開催して学生セミナーを含む全学事業についての意見交換を行うようになった。

平田学長補佐の下で、全学事業推進室長の岩瀬峰代助手(現・講師)は、実行委員会の開催回数を増やし、学生自身が自主的に、かつ議論を尽して企画を行うよう配慮するとともに、すべての実行委員会に参加して企画の進展を見守り、適宜、助言を行った。5 年一貫制が文化科学研究科以外で段階的に平成 16、18、19 年度に始まり、博士論文作成までに時間的余裕のある学生が増えたこともあって、実行委員を希望する学生が増えた(資料Ⅴ)。実行委員会の活動を通して専攻を越えた学生のネットワークが広がり、引

継ぎも文書により円滑に進むようになった。この頃の学生セミナーについて、平成 19 年 3 月に行われた全学事業推進室の外部評価では、以下のように評価されている。

特に、学生セミナーでは、学生を受身の立場ではなく企画に積極的に参加させること等を通じて、学生の総合的な知識、コミュニケーション能力が向上するような教育的配慮を行った結果、学生の意識にはっきりとした変化が見られるようになった。これには、全学事業推進室長の能力と熱意によるところが大きいと考えられる。(全学事業推進室外部評価報告書(平成 19 年 3 月 30 日)より抜粋)

この報告書に見られるように、今までは学生セミナー当日の企画は参加者の視野を広め交流を深める目的で行われて来たが、これに加えて実行委員会の準備活動が教育効果を持つアクティブ・ラーニングと捉えられるようになってきた。専攻を越えた学生のネットワーク作りに関しても、学生セミナー当日に知り合っただけではメールを交換するだけより、1 年間、実行委員会活動で苦楽を共にした関係の方が強いのは当然である。

学生セミナーの内容にも、以下の変化があった。(1)平成 16～18 年度前学期に、研究に必要なスキルを身につけることを目的とした企画「ディベート入門」、「コミュニケーション概論」、「身につくプレゼン」が行われた。担当した学外の講師が「コミュニケーション概論」はロールプレイ、「身につくプレゼン」はプレゼンの実習として、聴衆を参加させる体験型イベントを行ったことも新しい点である。(2)従来は、ディスカッションとしては、講師を囲んでのディスカッションと自由時間に行われる学生どうしの自発的なディスカッションが主体で、年度によってはパネルディスカッションが行われた程度である。しかし、平成 18 年度前学期からは全員参加型のディスカッションが行われている。これは、実行委員会が準備したテーマと資料(資料VI参照)をもとに、グループ分けされた参加者(学生と教員)がグループごとに議論をして意見をまとめ、最後に各グループの代表が全員の前で発表するというものである。このような全員参加型ディスカッションは、その後、講演と並んで学生セミナーの柱になった。(3)専攻紹介は、初期の学生セミナーでは口頭発表で、平成 6～16 年度前学期はポスターセッションとして行われてきたが、その後は形を変えて行われたり、行われなかったりしている。平成 20、21 年度前学期には動画により、平成 22 年度前学期は「他分野との交流」のセッションで他己紹介・自己紹介として各グループ内で専攻紹介が行われた。

(平成 19～24 年度)(前学期の学生セミナーについて；後学期は後述)

平成 18 年度までに確立した形式を基本としているが、少しずつ変化している。たとえば、平成 19 年度からは、各年度の全体テーマに基づき 3 つのサブテーマを設け、サブテーマごとに実行委員会を 3 つのグループに分けて、それぞれを担当させるようになった。また、学生セミナー自体ではないが、実行委員会活動から発展して総研大全学教育事業(学生企画事業)を行う等、新たな自発的活動が始まる例が現れた(平成 19 年度 11 月 8-9 日の「総研大ワークショップ」など)。学生セミナー委員会自体の大きな変化は、平成 23 年度から実行委員会活動に PBL(プロジェクトベースラーニング)を導入したことである。すなわち、実行委員会は単に学生セミナーを企画するだけでなく、プ

プロジェクトを実行して、その成果を企画に反映させるようになった。平成 23 年度実行委員会は、学際ネットワーク構築、地域連携、社会への発信の 3 つのプロジェクトに分かれて活動した。この活動により学内外との新たなネットワークができた。たとえば、学際ネットワーク構築プロジェクトでは、北陸先端科学技術大学院大学、奈良先端科学技術大学院大学との交流が始まっている。

学生セミナーを支える組織については、平成 22 年 4 月に学融合推進センターが設立され、全学事業推進室が廃止された。これに伴い、学生セミナーは総合教育科目としては同センターの学融合教育事業、実行委員会活動は学術交流事業の中で行われるようになった。

また、平成 21 年 10 月に教育工学を専門とする奥本素子助教、平成 23 年 2 月に学習科学・認知科学を専門とする山田雅之助教が採用され、実行委員会と学生セミナーに参加するようになった。これにより学生セミナーおよび実行委員活動に対する教育の専門家の視点が強化され、実行委員会を 3 つに分けてそれぞれ PBL を行うというきめ細かな対応が可能になった。

(平成 16～24 年度後学期学生セミナー)

後学期学生セミナーは平成 16 年度に始まった。前学期学生セミナーと同様のやり方で行われているが、以下の点で異なる特徴をもつ。(1)参加者や実行委員は留学生が過半数なので、実行委員会も学生セミナーも基本的に英語で行われ、日本語は補助的に用いられる。(2)平成 18 年度に「水ロケットの作成と打ち上げ」を行って以来、毎年、アクティビティーという名前で天体観測、鉱石ラジオ作成などを行っている。なお、夕食後は様々なゲームやクイズを企画し、親睦を深める機会としていている。(3)学生セミナーの直後に連続して日本文化紹介コースがある。平成 24 年度は、これに参加することを授業単位取得に必須とした。

4. おわりに

最初に述べたように、学生セミナーは、広い視野の獲得と学生・教員間の相互交流を目的に行われているが、その内容はずいぶん変化してきた。

広い視野の獲得について：平成 2 年度「科学と人間と環境を考える」から平成 6 年度「異分野へのアプローチを考える」あたりの学生セミナーは、重要な問題に対しては専門分野を越えて議論できるようになること、すなわち「科学の総合性」を目指したものだ。しかし、平成 17 年度「道」あたりから平成 24 年度“CONNECT & SPREAD WIDELY”になると、主題はコミュニケーション、ネットワーク、キャリアデザインなど「人間の総合性」に入るものになっている。現に、総研大平成 24 年度年度計画でも、学生セミナーは人間の総合性を涵養する教育の 1 つとして位置づけられている。

交流について：講演と講師を囲む討論という形式の中では、前学期の学生セミナーに集まる 100 人以上の学生の交流は困難で、当日の学生間交流は自由時間の会話が主体だ

った。平成 18 年度から参加者をグループ分けして全員が参加するディスカッションが行われるようになった。これにより、自由時間以外でも、参加者が主体的に参加したという意識を持てるようになった。また、後学期の学生セミナーの場合、アクティビティと呼ぶプログラムは同じく全員参加型だが、ほとんど親睦(文化の違いを理解すること)が目的になっている。

学生セミナー委員会：形式的には平成 16 年度前学期まで、実質的には平成 12 年度まで、学生セミナーの企画は実施委員会の教員と実行委員会の学生が一緒に行って来た。この頃でも学生は意見を言っていたが、教員がリードすることの方が多かったようである。その後、基本的には企画を学生の実行委員会に任せ、助言を求められた時だけ教員が意見を言うようになった。さらに、学生委員会活動の教育効果が注目され、その延長で学生企画の新たな交流活動が始まることも起きた。平成 24 年度前学期学生セミナーの委員会からは計画的に PBL を行うようになった。

以上、学生セミナーの歴史をまとめてみた。これが今後の学生セミナーを議論する時の参考になれば、幸いである。これをまとめる上で、岩瀬峰代講師と柴田猛学融合推進事務室長には、資料集めで特にお世話になった。また、湯川哲之特任教授、平田光司教授、岩瀬峰代講師ほか、多数の方々の助言と議論に感謝する。(文責・桂 勲)

B. 学生セミナー(平成 24 年度現在)の概要

1. 事業目的

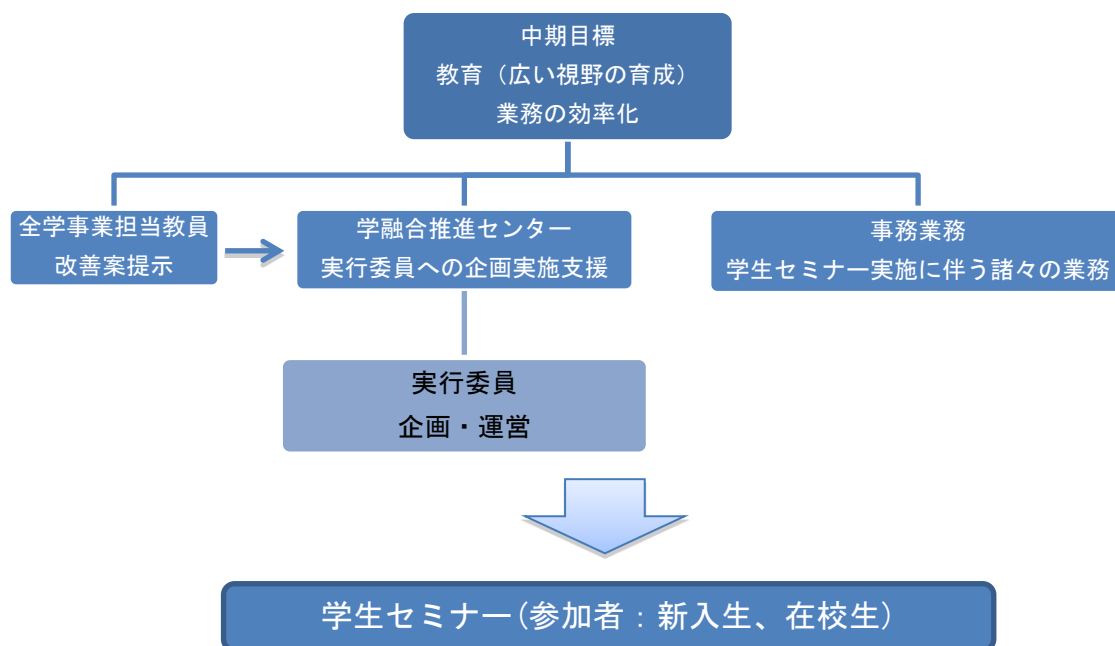
本事業は、中期目標に掲げた「専攻を置く基盤機関の優れた人的・研究的環境を活用し、高度の研究的資質、広い視野及び国際的通用性を兼ね備えた一流の研究者を育成し、質の高い学位取得者を社会に送り出す」ことを目的に、中期計画に掲げた「広い視野を養成するために、専攻及び研究科の枠を越えた教育研究活動を実施」したものである。

学生が「広い視野」を持つためには、自分自身でネットワークを構築し、様々な研究資源(特に総研大のリソース)を活用して分野横断的に学べるようにする必要がある。

入学直後に開催される学生セミナー事業は、新入生に対して、「広い視野」を持つ必要性および研究者ネットワーク構築が研究の発展に結びつくことを認識させる機会とする。

2. 事業概要

学生セミナーとは、在校生が実行委員会を組織し、実行委員会が中心となり企画運営がなされる教育型事業である。実行委員会の企画・運営にあたっては、中期目標に適しているか全学事業担当教員が評価し、改善案を提示する。その提案を反映させるように学融合推進センター教員が学生セミナー実行委員の指導・支援を行う。また、委員会活動に伴う手続き等は担当事務が業務支援を行う。



2-1. 実行委員の役割

学生セミナー実行委員は事業目的の実現に向けて、新入生に「ネットワークの必要性」「他者とのコミュニケーションの難しさ」を意識させるような講演のセッションや体験型セッション、ディスカッションセッションなど様々な企画を実施している。例えば、

講演のセッションの場合、講演者との事前打ち合わせを行い、実行委員の企画意図を十分に伝え、講演の内容を的確に理解できるようにグループに分かれて議論をさせるといった配慮を行っている。つまり、学生セミナーに参加した学生全員が、「ネットワークの必要性」「他者とのコミュニケーションの難しさ」について自分自身の課題として考えられるような工夫しながら実施している。

さらに、年度によって異なるが、夕食懇談会、自己紹介、体験型セッションなどにおいて各専攻(各基盤)を知ることが出来る企画についてもセミナーに組み入れている。このことにより、総研大生としてのアイデンティティの形成に繋げることを目指している。なお、1年間実施された実行委員会活動については、次年度の実行委員に対して実行委員会および文章で引き継ぎを行っている。

2-2. 教員の役割

全学事業担当教員(各専攻の教員)は学生セミナーに参加し、プログラムが「広い視野の育成およびネットワーク構築」に寄与しているかについて評価し、改善提案を行っている。また、実行委員の企画に協力し、実行委員会活動および当日の実施を支援している。

学融合推進センター教員は実行委員会活動において、事業目的を十分に説明し、ネットワーク構築に必要なコミュニケーション促進プロジェクトを企画運営させる。その際、学生セミナーの事業目的が達成できるように実行委員に適切な助言を行い、実行委員会活動を指導・支援している。さらに、学生セミナーおよび学生セミナー実行委員会活動の教育的効果について分析を行い、改善の資料としている。

2-3. 事務の役割

総研大の中期計画に掲げた「広い視野を養成するための専攻及び研究科の枠を越えた教育研究活動」である本事業の実施には教員と事務との連携が欠かすことができない。平成16年度より教員と事務との話し合いの上、実施している(資料VIII-1、VIII-2)。

現在、学生セミナーおよび実行委員会開催において適切な事務的な支援体制が取られている。しかしながら、会場や日程の変更に伴って業務量は変わるため、教員と事務組織との情報共有は常時行う必要がある。また、実行委員会活動に伴う諸手続きを行うために、その活動の意義や必然性について把握する必要がある。したがって内容・到達目標についても、情報共有は重要である。

3. 参加学生の意識

参加者へのアンケートは学生セミナー開催当初から行っている。今回の資料は平成16年度以降のアンケートとレポートを掲載しており、下記に概要をまとめた。

- ・ 平成16年度、18年度のアンケート

[質問]「他の専攻の学生と連絡を取りたいか」「参加者同士のメーリングリストを作りたいか」「メーリングリストはどのような内容を話し合いたいか」

[結果]90%の参加者が他専攻の学生と連絡をとりたい、70%前後の学生がメーリングリストを作りたいと答えている。また、話したい内容は「研究成果」「研究の考え方」「研究生活」についてが上位を占め、入学後の研究生活において他分野の学生と交流を望んでいることがわかった。

- 平成 21 年度、平成 23 年度、平成 24 年度のアンケート

[質問]「就きたい職業」「将来目指すもの」「国際的に活躍する研究者に必要な能力とは」

[結果]90%以上の学生が研究者を希望し、40～60%が将来、最先端の科学を追求したいと答えていた。また、「コミュニケーション能力」「語学力」「専門性」は平成 21、23、24 年度ともに必要な能力であると考えていること、さらに平成 23 年度、24 年度では「広い視野」の必要性を理解していることがわかった。

- 平成 22 年度アンケート・インタビュー調査

アンケート結果から学生セミナー参加により、学際交流、コミュニケーション能力の獲得、ネットワーク形成に対する意識が高まったという傾向が伺えた。また、参加者インタビューを講演者、教員、学生にそれぞれ行ったが、他の分野の研究者(学生)と話し合える貴重な機会であることについては意見が一致していた。しかしながら、学生セミナーで培った学際的な研究交流意識を、どのように継続、他の活動へ連携させていくかについては検討する必要がある。

4. 学生セミナー実行委員会

学生セミナー実行委員活動は「学生セミナーの歴史」にも記述してあるように、変遷してきている。

学生主体的な企画・運営を実質化するために、平成 17 年度からは「実行委員自身を作り上げること」を認識することと「実行委員会の組織作り」を目標とした。また、学生セミナーという学際的な研究交流事業の企画・運営を 1 年間かけて実施することから、プロジェクトベースドラーニング(以下、PBL)と呼ばれる学習形態を踏襲して実行委員に企画・運営を行わせることにした。PBL は問題にとりくむ行為で、主体や、その学習環境などを包括する概念であり、「問題の自覚と問題解決の実践は切り離せない」という学習観に基づいている。つまり、PBL は達成すべき課題に対して、学生が主体となって問題解決のプロジェクトを実施する形式の学習である。はじめに教員が学生に課題を提示するが、これ以降、教員は学生自身の活動を促進するために支援者となる。PBL によって学生達は、自分達だけで問題解決に向かって取り組むことにより、問題設定・解決力、コミュニケーション力、チームワーク力、リーダーシップ、創造性など、多くの能力の向上を行うことができると考えられている。

平成 17～21 年の実施を経て、学生セミナー実行委員体験が、どのような学びの効果が、学生がそこで何を得ているのかについて平成 22 年度に調査分析を行った。その結果、学生セミナー実行委員会自体を適切に運営していくためには、委員全体が活動に参加できる体制作りを勧めていかなければならないこと、その際、学生の自主性に任

すのではなく、教員側も適切な支援をしていく必要があることがわかった。

そこで、平成23年度からはチームごとにプロジェクト活動を行い、学生セミナーでの目的である学際交流、コミュニケーション能力の獲得、ネットワーク形成について深く学ぶ機会を作った。その後、プロジェクト実施における学びを反映させた学生セミナープログラムを企画・実施するようにした(資料Ⅶ)。その結果、学生は具体的な課題を設定し、課題解決という目標に向かって意欲的に取り組むことができたと考えられた。このことから、学生セミナー実行委員会活動自体がとても良い学びの機会となっていることがわかった。

また、実行委員体験は人的ネットワークの形成に結びついており、人的ネットワークを形成することで学際交流への動機づけが高まるといわれている。実際に実行委員経験者は学生企画事業を企画・実施する場合も多くなっている。しかしながら、学生セミナー実行委員の活動は負担が大きいのではないかという意見も出ている。

したがって、今後も学生実行委員会活動についても十分な調査分析を行いながら、慎重に実施していくべきであると考えられる。

5. 今後の課題と改善案

① 学生セミナーで培われた学際性や視野の広さがその後の学生生活にどのように影響を与えているのかを中長期的に評価する必要がある。

⇒ 学生セミナーの長期的な効果を計れるような調査を行う。例えば、在学中あるいは修了後にアンケート調査を実施する。

② 学生セミナーは学生主体の参加型事業のため、多くの場面で学生間の議論ができる場を意識的に設けている。今後はこれらの議論の質を向上させ、より有意義な対話の機会になるような工夫が必要だと考えられる。

⇒ 企画の段階で、教員側から学生セミナー実行委員に議論の場におけるデザイン等のアドバイスをを行う。

③ 平成24年度現在、各研究科で学生が企画・運営する事業(文化科学、生命科学・先端科学、物理科学)が実施されるようになっている。目的、実施内容を整理し、委員になる学生への負担の軽減と効率化について検討を行う必要がある。

⇒ 各専攻の教員を入れた委員会で検討を行い、各研究科で行われている事業に合わせ整理する。

④ 学生セミナーの単位化についてはこれまでも議論がなされている。さらに、本報告書をまとめるにあたり、学融合推進センター教育事業担当教員からも検討した方が良いというアドバイスをいただいている。

⇒ 「全新入生が参加できるように時間を短くして単位を出さず、交流事業とする。」あるいは「総合教育科目として質的にも時間的にも充実させる。」などの案を提示して、センター運営委員会で検討を行う。

(注:平成25年1月に開催された学融合推進センター運営委員会で総合教育科目とする方針となり、総合プログラム委員会において総合教育科目として単位付与が認められたされた)

学生セミナーはこれまでも多くの教員・学生が関わり、議論しながら作り上げてきた。現在もより良いセミナーを目指して、試行錯誤の過程にある。おそらく、完成型と呼べるものはできないかもしれない。毎年、より良いセミナーを目指して実施し、そして次世代に受け継いで行くことこそが、総研大学生セミナーの大きな役割の一つなのではないかとも思っている。

これをまとめる上で、奥本素子助教には、資料作成で特にお世話になった。また平田光司教授、桂勲教授ほか、多くの方々の助言と議論に感謝する。

(文責 岩瀬峰代)

参考文献一覧(以下に資料として添付したものを除く)

1. 学生セミナーのパンフレット(平成2、3、8～11年度、17～24年度前・後学期)
2. 「総研大十年史 -分析と総合-」平成11(1999)年6月発行
3. 「総研大15周年記念誌-第2ステージと法人化-」平成16年11月12日刊行
4. 「博士課程教育に関する在学生の意識調査」平成16年3月発行
5. 平成14年度学生セミナー委員たちが築いた分散の中のコミュニケーション(総研大ジャーナル2号 p44-47、2002)
6. 平成19年度前期学生セミナー実行委員会がスタート 全分野交流がはぐくむ総研大のアイデンティティ(総研大ジャーナル10号 p38 -39、2007)
7. 総研大生が企画した初の総研大ワークショップ(総研大ジャーナル13号 p36-39、2008)
8. 「つながる学びひろがる学び」全学事業推進室活動報告書(平成22年3月23日)
9. 「研究のサードプレイス」学術交流事業、実践的な問題解決能力活動報告書(平成23年3月31日)
10. 「研究力を探る」学術交流事業、実践的な問題解決能力活動報告書(平成24年3月31日)
11. 奥本素子(2011)博士課程大学院生の分野を越境した研究交流に対する動機付けと体験に関する考察. 日本教育工学会論文誌 34(4): 395-405
12. 奥本素子・岩瀬峰代(2012)プロジェクトベースドラーニングにおける自発的行動分析. 日本教育工学会論文誌(印刷中)
13. 池田光穂 工学部教育のためのPBL入門(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/090209PBL_UtsunomiyaIT.html
アクセス2012.2.12
14. 松田直浩 喜多一(2006)京都大学学術情報メディアセンター・喜多研究室

資料 I . 総研大年表

(学生セミナー関連)

昭和63(1988)年

10月1日 総合研究大学院大学開学
初代学長：長倉三郎

平成元(1989)年

4月24日 第1回入学式(於・学会館)
(平成2～6年度の入学式は、基盤機
関ごとに行われた)

平成2(1990)年

1月16日 初代副学長：廣田榮治
4月1日 学生セミナー委員会設置要項
(学長決済、平3.9.18まで適用)
4月18日 第1回学生セミナー実施
委員会開催
6月27-28日 最初の学生セミナー
「科学と人間と環境を考える」
於・箱根アカデミーハウス

平成3(1991)年

4月12日 教育研究交流センター設置
センター長事務取扱：廣田榮治
(平5.3.31まで)
5月10-11日 学生セミナー
「21世紀を考える・「進歩」神話の
後に来るもの」
於・関西地区大学セミナーハウス・
国立民族学博物館
9月19日 学生セミナー実施要項
(学長決済、平16.6.8まで適用)

平成4(1992)年

5月6-7日 学生セミナー
「現代科学の現状と未来を考える」
於・湯河原厚生年金会館

平成5(1993)年

5月17-18日 学生セミナー
「異文化へのアプローチを考える」
於・愛知県労働者研修センター

平成6(1994)年

4月25-26日 学生セミナー
「研究者のあり方について考える」
於・東山荘(日本YMCA同盟研修
センター)

平成7(1995)年

2月27日 葉山キャンパスに移転
4月1日 第2代学長：廣田榮治
教育研究交流センター長：
高畑尚之(平9.3.31まで)
4月24日 入学式
(全専攻の学生が集まる入学式が再開)
4月24-25日 学生セミナー
「想像を担う私たちの研究環境につ
いて考える」
(これ以降、葉山キャンパスとその付
近で、入学式に引き続いて開催する
ようになったため、以下では場所を
省略する)

平成8(1996)年

4月8-9日 学生セミナー
「生と死の科学について考える」

平成9(1997)年

4月1日 教育研究交流センター長：
湯川哲之(平13.3.31まで)

4月17-18日 学生セミナー
「伝える」

平成10(1998)年

- 4月9-10日 学生セミナー
「論争」
(次年度の学生セミナーについて討論)
- 平成11(1999)年
4月8-9日 学生セミナー
「さまざまな環境を理解する」
(次年度の学生セミナーについて討論)
- 平成12(2000)年
4月6-7日 学生セミナー
「時代の区切り」
(この回から担当専攻制を廃止した)
- 平成13(2001)年
4月1日 第3代学長：小平桂一
4月1日 教育研究交流センター長：
平田光司(平16.3.31まで)
4月5-6日 学生セミナー
「社会における基礎研究の役割」
- 平成14(2002)年
4月18-19日 学生セミナー
「我々の目指す研究者とは」
- 平成15(2003)年
4月17-18日 学生セミナー
「研究者としての選択・適応・戦略」
- 平成16(2004)年
4月1日 法人化
生命科学研究所5年一貫制導入
教育研究交流センター廃止
(教育研究情報資料センターと統合
して葉山高等研究センターに改組)
全学事業推進室発足
岩瀬助手(現・講師)着任
4月22-23日 前学期学生セミナー
- 「魂」
6月9日 学生セミナー実施要項
(学長裁定、平18.6.5および
平20.4.1に一部改正)
10月12-13日 後学期学生セミナー
「Science and society in modern
Japan」
(この年が最初)
- 平成17(2005)年
4月7-8日 前学期学生セミナー
「道」
10月13-14日 後学期学生セミナー
「Being a researcher in Japan」
- 平成18(2006)年
4月1日 5年一貫制導入
(物理科学、高エネ、複合科学)
4月6-7日 前学期学生セミナー
「対話」
10月12-13日 後学期学生セミナー
「Challenge」
- 平成19(2007)年
4月1日 先導科学研究科改組
(生命共生体進化学専攻)
4月5-6日 前学期学生セミナー
「2007年 研究者への旅」
10月11-12日 後学期学生セミナー
「2007年 Big Things Start Small」
- 平成20(2008)年
4月1日 第4代学長：高畑尚之
4月3-4日 前学期学生セミナー
「Wa 我・話・和 We talk together」
10月9-10日 後学期学生セミナー
「Together in Harmony -
Communication, Dedication, and

Motivation -]

10月11-12日 後学期学生セミナー
「Follow your rainbow」

平成21(2009)年

4月9-10日 前学期学生セミナー
「研究者の三原色」- “研究能力”、
“コミュニケーション”、“夢”
10月1日 奥本素子助教が全学事業推
進室に着任
10月8-9日 後学期学生セミナー
「UNITY と IDENTITY」

平成22(2010)年

4月1日 学融合推進センター発足
(全学事業推進室廃止)
4月8-9日 前学期学生セミナー
「Re:」
10月7-8日 後学期学生セミナー
「Knowledge and Imagination」

平成23(2011)年

2月 1日 山田雅之助教が学融合推進
センターに着任
4月7-8日 前学期学生セミナー
「DNA」
4月27-28日 学融合推進センター棟
開所式
平成24年度学生セミナー委員に
project based learningを導入
10月13-14日 後学期学生セミナー
「Dream to Discovery」

平成24(2012)年

4月12-13日 前学期学生セミナー
「つながる Connect and spread
widely」

資料Ⅱ．学生セミナーの規則(実施要項)

総合研究大学院大学学生セミナー実施要項

〔平成3年9月19日〕
〔学長決裁〕

- 第1 本学の学生が主体となって、作成する計画に基づき、各研究科・専攻に共通する課題について、学生及び指導教官等による意見発表、討議等を行い、相互の理解を深めると共に、幅広い視野を得るために、毎年度開講する。
- 第2 学生セミナーについて企画し、及び実施に関する事項の処理に当たるため、総合研究大学院大学教育研究交流センター運営規則第7条題3項の規定に基づき、学生セミナー実施委員会(以下、「実施委員会」という。)を置く。
- 第3 実施委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
- 一 教育研究交流センター長
 - 二 教育研究交流センターの教授
 - 三 教育交流センター運営委員会から選出された者 若干名
 - 四 各専攻から選出された教官 各1名
 - 五 前各号のほか、学長が必要と認める者
- 第4 実施委員会に、委員長を置き、教育研究交流センター長をもって充てる。
- 第5 実施委員会に、実行委員会を置き次の各号に掲げる委員をもって組織する。
- 一 各専攻から選出された学生 各専攻若干名
 - 二 前号のほか、学長が必要と認める者
- 第6 実施委員会は、審議の経過及び結果を教育研究交流センター運営委員会に報告するものとする。
- 第7 実施委員会に関する事務は、事務局で処理する。
- 第8 この要項に定めるもののほか、実務委員会の運営に関し必要な事項は、別に定めるものとする。

附 則

- 1 この要項は、平成3年9月19日から施行する。
- 2 委員の任期については、学生セミナー開催年度ごとに定めるものとする。
- 3 学生セミナー委員会設置要項(平成2年4月1日学長決裁)は、廃止する。

総合研究大学院大学学生セミナー実施要項

〔平成16年6月9日
学長裁定〕

一部改正 18.6.6/20.4.1

(目的)

第1条 学生セミナーは、総合研究大学院大学(以下「本学という。」)の学生が主体となって作成する実施計画に基づき、各研究科・専攻に共通する課題について、学生及び指導教員等による意見発表、討議等を行うことにより、本学の学生に広い視野を修得させるとともに、学生及び指導教員間との相互交流を深めることを目的とする。

(実施の原則)

第2条 学生セミナーは、研究科総合教育科目の授業科目として、毎年度開講することを原則とする。

(講義の基本)

第3条 学生セミナーは、短期合宿型集中講義とし、前学期及び後学期に各1回開講することを基本とする。

(学生セミナー実施委員会)

第4条 学生セミナーの企画及び実施に関する事項の処理に当たるため、学長補佐(全学事業担当)の下に学生セミナー実行委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(前学期開講の委員会)

第5条 前学期に開講する委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長補佐(全学事業担当)
- (2) 各専攻から選出された学生(原則として1人以上)
- (3) 学長補佐(全学事業担当)が必要と認めた者

(後学期開講の委員会)

第6条 後学期に開講する委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長補佐(全学事業担当)
- (2) 各研究科から選出された学生(原則として1人以上)
- (3) 学長補佐(全学事業担当)が必要と認めた者

(委員長)

第7条 委員会に委員長を置き、委員長は第5条及び前条に規定する委員会ごとに選出するものとする。

2 前項の委員長は、第5条第2号又は前条第2号に規定する学生の互選とする。

(報告)

第8条 学長補佐(全学事業担当)は、審議の経過及び結果を運営会議に報告するものとする。

(履修認定及び単位授与)

第9条 学生セミナーの履修の認定及び成績の評価については、受講者の出席状況及びレポート課題等により学長補佐(全学事業担当)が行い、履修の認定に合格した者に所定の単位を授与する。

(事務)

第10条 学生セミナーに関する事務は、企画事務については全学事業推進室が、実施事務については葉山共通事務室が処理する。

(雑則)

第11条 この実施要項に定めるもののほか、学生セミナーの実施に関して必要な事項は、学長補佐(全学事業担当)が別に定める。

附則

- 1 この要項は平成16年6月9日から施行する。
- 2 委員の任期については、学生セミナー開講年度の学期ごとに定めるものとする。

附則

この要項は、平成18年6月6日から施行し、平成18年4月1日から適用する。

附則

この要項は、平成20年4月1日から施行する。

資料Ⅲ. 各年度の学生セミナー実施状況

平成2年度前学期学生セミナー

【開催日】平成2年6月27日(水)～6月28日(木)

【内 容】

テーマ「科学と人間と環境を考える」

プログラム

講演1 古在由秀 (国立天文台長)

セミナーⅠ 統計科学、加速器科学、放射光科学専攻の学生による教育研究の実施状況及び研究所の研究活動の現状等の紹介

セミナーⅡ テーマごとに討論(9グループ)

講演2 赤池弘次 (統計数理研究所 所長)

セミナーⅢ Aセッション(小林克己放射光科学専攻助教授、福井勝義地域文化学助教授)

Bセッション(平林洋美加速器科学専攻教授、永田恭介遺伝学専攻助手)

Cセッション(赤川公朗生理科学専攻所教授、竹内延夫国立公害研究所高層大気研究室長)

Dセッション(伊藤栄明統計科学専攻教授、阿形清和分子生物機構論専攻助手)

【会 場】箱根アカデミーハウス

【担当専攻】統計科学、加速器科学、放射光科学

【参加者】学生71名、教員28名、計99名(ただし、学長、副学長は数に含まない。以下同様)

平成3年度前学期学生セミナー

【開催日】平成3年5月10日(金)～5月11日(土)

【内 容】

テーマ「21世紀を考える～「進歩」神話の後にくるもの」

プログラム

発表1 パネラー：秋道智彌(比較文化学専攻助教授)

コメンテーター：西田生郎(分子生物機構論専攻助手)+学生2名

発表2 パネラー：落合恵美子(同志社女子大学講師)

コメンテーター：須藤健一(比較文化学専攻助教授)+学生2名

発表3 パネラー：加藤尚武(千葉大学文学部教授)

コメンテーター：林 茂生(国立遺伝学研究所助手)+学生2名

発表4 パネラー：勝木 渥(信州大学理学部教授)

コメンテーター：深尾葉子(大阪外大講師)+学生2名

パネルディスカッション(パネラー、コメンテーター、参加者)

夕食兼懇親会

文化科学研究科紹介

4つの小グループに分かれて討議

2日目は、国立民族学博物館見学

講演 山口昌男(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)

【会場】関西地区大学セミナーハウス、国立民族学博物館

【担当専攻】地域文化学、比較文化学

【参加者】学生74名、教員29名、計103名

平成4年度前学期学生セミナー

【開催日】平成4年5月6日(水)～5月7日(木)

【内容】

テーマ「現代科学の現状と未来を考える」

プログラム

講師

岡田節人(前岡崎国立共同研究機構長)

小林茂保(東レ株式会社バイオマテリアル研究所長)

中村桂子(早稲田大学人間科学部教授)

松尾義之(日経サイエンス)

石崎宏矩(名古屋大学理学部教授)

伊藤正男(理化学研究所国際フロンティア研究システム長)

【会場】湯河原厚生年金会館

【担当専攻】遺伝学、分子生物機構論、生理科学

【参加者】学生106名、教員49名、計155名

平成5年度前学期学生セミナー

【開催日】平成5年5月17日(月)～5月18日(火)

【内容】

テーマ「異分野へのアプローチを考える」

プログラム

講演1 永田親義(財団法人基礎化学研究所評議員)

講演2 木村栄一(広島大学医学部総合薬学科教授)

自由時間

夕食・懇親会

分科会

講演3 井口洋夫(岡崎国立共同研究機構長)

北川禎三(機能分子化学専攻教授)

講演4 本島 修(核融合科学専攻教授)

佐藤哲也(核融合科学専攻教授)

【会場】愛知県労働者研修センター

【担当専攻】構造分子科学、機能分子科学、核融合科学

【参加者】学生126名、教員41名、計167名

平成6年度前学期学生セミナー

【開催日】平成6年4月25日(月)～4月26日(火)

【内 容】

テーマ「研究者のあり方について考える」

プログラム

講演1 高柳雄一((株)NHKクリエイティブ)

専攻紹介(ポスターセッション)

講演2 佐々木力(東京大学教養学部教授)

自由時間

夕食・懇親会

分科会

講演3 森本雅樹(鹿児島大学教養部教授)

パネルディスカッション

【会 場】東山荘(日本YMCA同盟研修センター)

【担当専攻】統計科学、天文科学、極域科学

【参加者】学生104名、教員34名、計138名

平成7年度前学期学生セミナー

【開催日】平成7年4月24日(月)～4月25日(火)

【内 容】

テーマ「創造を担う私たちの研究環境について考える」

プログラム

講師 慶伊富長(北陸先端科学技術大学院大学長)

Robert G. Geller(東京大学助教授)

河本哲三(立命館大学教授)

丸山瑛一(オングストロームテクノロジー研究機構常務理事)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【担当専攻】遺伝学、加速器科学、放射光科学

【参加者】学生103名、教員36名、計139名

平成8年度前学期学生セミナー

【開催日】平成8年4月8日(月)～4月9日(火)

【内 容】

テーマ「生と死の科学について考える」

プログラム

専攻紹介(ポスターセッション)

講演1 森岡正博(国際日本文化研究センター助手)

講演2 佐倉 統(横浜国立大学経営学部助教授)

自由時間

夕食懇親会

フリーディスカッション

講演3 田沼靖一(東京理科大学薬学部教授)

講演4 立花 隆(評論家・東京大学先端研客員教授)

討論会(森岡+佐倉+田沼+立花)

【会 場】本学葉山キャンパス及びロフォス湘南

【担当専攻】不明

【参加者】学生121名、教員33名、計154名

平成9年度前学期学生セミナー

【開催日】平成9年4月17日(木)～4月18日(金)

【内 容】

テーマ 「伝える」

プログラム

専攻紹介(ポスターセッション)

講演1 池内 了(大阪大学理学部宇宙・地球科学科教授)

講演2 山本 弘(SF作家、ゲームデザイナー)

自由時間

夕食懇談会

フリーディスカッション

講演3 西江雅之(早稲田大学文学部教授)

総研大研究発表1 子島 進(総合研究大学院大学地域文化学専攻 在学生)

総研大研究発表2 南 達也(総合研究大学院大学放射光科学専攻 在学生)

総合討論(パネルディスカッション)

【会 場】本学葉山キャンパス及びロフォス湘南

【担当専攻】不明

【参加者】学生123名、教員30名、計153名

平成10年度前学期学生セミナー

【開催日】平成10年4月9日(木)～4月10日(金)

【内 容】

テーマ 「論争」

プログラム

講演1 小宮山宏(東京大学院工学系研究科化学システム工学専攻教授)

講演2 宮田 隆(京都大学院理学研究科生物科学専攻教授)

夕食懇談会

フリーディスカッション

専攻紹介(ポスターセッション)

講演3 川合 光(KEK素粒子原子核研究所理論部教授)

講演4 清水明俊(総合研究大学院大学地域文化学専攻)

総合討論(平成11年度の学生セミナーについて)

【会場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【担当専攻】不明

【参加者】学生102名、教員34名、計136名

平成11年度前学期学生セミナー

【開催日】平成11年4月8日(木)～4月9日(金)

【内容】

テーマ 「さまざまな環境を理解する」

プログラム

講演1 井口泰泉(横浜市立大学)

講演2 堀口敏宏(国立環境研究所)

夕食懇談会

フリーディスカッション

専攻紹介(ポスターセッション)

講演3 伊谷純一郎(京都大学名誉教授)

講演4 Augustin Berque(宮城大学)

総合討論(平成12年度の学生セミナーについて)

【会場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【担当専攻】比較文化学、統計科学、核融合科学、極域科学、遺伝学

【参加者】学生129名、教員31名、計160名

平成12年度前学期学生セミナー

【開催日】平成12年4月6日(木)～4月7日(金)

【内容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、以下の目的で企画した。

新しい世紀に向かうこの世界を見据える大局的な「眼」を持っておられる講師をお招きして、これまでのご自身の専門分野の発展と今後の展望等を学生に期待する事も含めてお話していただき、私たち学生が来世紀の研究者として何を目指すべきか、その目標とも言えるようなものを得る機会とする。

テーマ 「時代の区切り」

プログラム

講演1 立花隆(評論家)

講演2 山折哲雄(京都造形芸術大学大学院院長)

講演3 松本元(理化学研究所 脳科学総合研究センターグループディレクター)

夕食懇談会

フリーディスカッション

専攻紹介(ポスターセッション)

総合討論

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター
【担当専攻】担当専攻制度を廃止(以下では、この項目を省略する)
【参加者】学生129名、教員30名、計159名

平成 13 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 13 年 4 月 5 日(木)～4 月 6 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、以下の目的で企画した。

「基礎研究は社会に必要なのだろうか」、「自分たちが行っている研究は広く理解を得ることができるのだろうか」、そして「知的活動はどのように社会に還元すればよいのか」など、研究を進める上で重要な問題について分野を越えて議論し考える機会とする。

テーマ 「社会における基礎研究の役割」

プログラム

(第1セッション)

講演伊藤光男(分子科学研究所顧問)

講演戸谷圭子(株式会社マーケティングエクセレンス社代表取締役社長)

大澤幸生(筑波大学社会工学系助教授)

第1セッション 討論

夕食懇談会

フリーディスカッション

(第2セッション)

講演道上尚史(外務省国際科学協力室長)

講演上田俊英(朝日新聞東京本社科学部記者)

第2セッション 討論

専攻紹介(ポスターセッション)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生110名、教員25名、計135名

平成 14 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 14 年 4 月 18 日(木)～4 月 19 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、以下の目的で企画した。

「研究者」につながる4つのキーワード、「創」、「感」、「伝」、「楽」を手掛かりに、「研究者」とは何かについて講師の方々に講演を行ってもらおう。その後、フリーディスカッションにおいて、講師の方々と新入生、在校生、教官も含め活発な意見交換を行い、己を見返し、お互いに理解することによって、大学院生が今後の研究者生活に生かす機会とする。

テーマ 「我々の目指す研究者とは？」

プログラム

講演「感」開発法子(財団法人日本自然保護協会保護研究部研究担当 専門部長)

講演「楽」赤池弘次(統計数理研究所 名誉教授)

講演「伝」大澤真幸(京都大学大学院 人間・環境学研究科 助教授)

講演「創」有馬朗人(東京大学名誉教授、参議院議員)

夕食懇談会

フリーディスカッション

全体ディスカッション

専攻紹介(ポスターセッション)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生126名、教員33名、計159名

平成 15 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 15 年 4 月 17 日(木)～4 月 18 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、以下の目的で企画した。

博士課程在学期間を中心とした「将来への準備期間」に焦点を当て、博士課程への進学という「選択」、博士課程における研究生生活を模索する「適応」、博士号取得後自らの道を切り開くための「戦略」、について講演、意見交換を行い、自らの将来像を明確にする良い機会とする。

テーマ 「研究者としての選択・適応・戦略」

プログラム

講演「選択」富永智津子(宮城学院女子大学教授、国立民族学博物館客員教授)

講演「適応」福地光男(総合研究大学院大学教授、国立極地研究所南極域環境モニタリングセンター)

夕食懇談会

フリーディスカッション

パネルディスカッション「戦略」

- ・新田伸也(平成15年3月総合研究大学院大学修了 予定)
- ・深川竜郎(総合研究大学院大学助教授)
- ・田嶋 敦(総合研究大学院大学非常勤研究員)
- ・中島 洋(北陸先端科学技術大学院大学助手)

専攻紹介(ポスターセッション)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生152名、教員38名、計190名

平成 16 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 16 年 4 月 22 日(木)～4 月 23 日(金)

【内 容】セミナー参加者が、研究を通じて何をしたいのか、自分が何を得たいのか「心の持ちよう」を明確にし、自分の研究以外にも視野を向けられる機会とできるよう在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が企画した。

テーマ 「魂」

プログラム 講演1 小林誠(総合研究大学院大学 素粒子原子核専攻長)

講演2 吉田憲二(総合研究大学院大学 比較文化化学専攻長)

講演3 中川人司(JAXA広報部 教育グループ 広報副主幹)
フリーディスカッション

小林誠(総合研究大学院大学 素粒子原子核専攻長)

吉田憲二(総合研究大学院大学 比較文化学専攻長)

中川人司(JAXA広報部 教育グループ 広報副主幹)

鄭 躍軍(総合地球環境学研究所助教授)

的川泰宣(JAXA広報・教育統括執行役)

ディベート入門

二杉孝司(金城学院大学 文学部教授)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生134名、教員34名、計168名

平成 17 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 17 年 4 月 7 日(木)～4 月 8 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員会が、セミナーの中で先輩研究者である講師の先生方の歩んでこられた道に触れる機会そしてこれまでまったく異なる道を歩んできた学生同士の「道」が交差する場として企画した。同じ境遇に立つ多くの友を得て、自分の道を切り開く糧としてもらえることを期待している。

テーマ 「道」

プログラム 講演1 黒須 正明(総合研究大学院大学 教授)

講演2 杉山 直(総合研究大学院大学 教授)

講演3 菅野 覚明(東京大学 教授)

フリーディスカッション

浦 聖恵 (大阪大学 助手)

遠藤 秀紀(京都大学 霊長類研究所 教授)

武田 英明(総合研究大学院大学 教授)

塚谷 裕一(総合研究大学院大学 助教授)

川口 幸也(総合研究大学院大学 助教授)

体験型イベント「コミュニケーション概論」

上 篤 (大手前大学 教授)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生120名、教員35名、計155名

平成 18 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 18 年 4 月 6 日(木)～4 月 7 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員会が、如何に自分と向き合い研究を掘り下げることが出来るかという「自分との対話」、如何に痛覚を伴う真剣勝負を経て研究を確立出来るかという「他者との対話」など、密度濃いく対話へ通じる突破口を考える場を提供したいと考えて企画した。

テーマ 「対話」

プログラム 講演1:「細胞シート工学による再生治療」

講師:岡野光夫(東京女子医科大学先端生命医科学研究所 所長・教授)

講演2:「情報世界と物理世界との円滑な対話を目指して」

講師:稲見昌彦(国立大学法人 電気通信大学 知能機械工学科 助教授)

講演3:「伝統文化芸術と先端技術との統合の試み」

講師:笠谷 和比古(国立大学共同利用機関 国際日本文化研究センター 研究部 教授)

フリーディスカッション

体験型イベント:「身につくプレゼン」(国際村センターBF1:国際会議場)

講師: 小林一郎(アサヒカコー株式会社代表取締役)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生121名、教員22名、計143名

平成 19 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 19 年 4 月 5 日(木)～4 月 6 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、「研究者への」旅として「発心～未知との遭遇～」「挫折～立ちはだかる壁～」「希望～終わりなき旅～」と 3 部構成からセミナーを開催した。このなかで、個々人が他専攻の入学生や先生方と柔軟に語り合い、新たな視点や発想を得ながら、「研究者としての人生」を疑似体験する機会とする。

テーマ「2007 年 研究者への旅」

プログラム セッション1:発心 ～未知との遭遇～

研究者という茨の旅路へと歩まんとする皆さんにとって、研究生活を始める上で、本セミナーが皆さん自身の”発心”と改めて向き合う最良の機会とする。

講演 甘利 俊一 (理化学研究所脳科学総合研究センター長)

辻 惟雄 (MIHO MUSEUM館長)

セッション2:挫折 ～立ちはだかる壁～

「新入生の皆様に、現在から未来の自分にどんな困難が待ち受けているか、その困難をどのように乗り切るのかを考えてもらい、そしてそれを発表することで多くの人と苦しみを分かち合い、困難という壁を乗り越える喜びを感じる機会とする。

セッション 3:希望 ～終わりなき旅～

学生セミナーに来たときの初心を思い出し、どんなときでも希望を見失わず、研究者への旅に向かっていけるようなセッションとする。

講演 諏訪 元先 (東京大学 総合研究博物館 助教授)

【会 場】本学葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生153名、教員29名、計182名

平成 20 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 20 年 4 月 3 日(木)～4 月 4 日(金)

【内 容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、異分野間のコミュニケーションを

コンセプトに学生参加型の授業を組み立てた。セミナーは「我」、「話」、「和」の3セッションに分かれており、「我」は自己表現、「話」は相互理解、「和」は他者との協奏をテーマとしている。

テーマ 「Wa 我・話・和 We talk together」

プログラム セッション1：我 ～自己の表現～

自己の表現セッションでは、自己表現の大切さ及びその難しさを新入生に理解してもらう場とする。

講演 小川 義和(国立科学博物館 学習課長)

セッション2：話 ～相互理解～

「相互理解」これは研究者として、人間として生きていくためには必要不可欠で、しかしとても難しい。このセッションでは相互理解を実践することを目的とする。

セッション3：和 ～他者との協奏～

分野の境界領域で研究をしている先生の講演を参考にして学術(分野)融合について、グループディスカッションを行い、それぞれの分野の特徴を活かしたプロジェクトを作る経験をする。

講演 酒井 邦嘉(東京大学 大学院総合文化研究科)

【会場】湘南国際村センター・葉山キャンパス

【参加者】学生110名、教員20名、計130名

平成 21 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成 21 年 4 月 9 日(木) - 10 日(金)

【内容】在学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、研究者として成就するための基本要素として「研究能力」「コミュニケーション」「夢」を挙げ、その3つの要素について考えるセッションを企画し、実施した。

テーマ 「研究者の三原色」- “研究能力”、“コミュニケーション”、“夢”

プログラム セッション1：研究者に必要な能力とは

講演1 岡ノ谷一夫(理化学研究所脳科学研究センター生物言語研究チームチームリーダー)

講演2 村山 斉(東京大学数物連携宇宙研究機構 <IPMU> 機構長)

講演3 田中洋子(筑波大学大学院人文社会科学研究科 准教授)

パネルディスカッション

セッション2：専門を越えた相互理解

ディスカッション

セッション3：自分の夢を再認識しよう

ディスカッション

【会場】ロフォス湘南

【参加者】学生107名、教員37名、計144名

平成 22 年度前学期学生セミナー

【開催日】平成22年4月8日(木)－9日(金)

【内容】在学学生で構成された前期学生セミナー実行委員が、「応答」という意味が込められている『Re:』をテーマに「Relationship」・「Realization」・「Researcher」について考えるセッションを企画し、実施した。

テーマ 『Re:』

プログラム セッション1: Relationship～他分野との交流～

各グループメンバーによる他己紹介と自己紹介

セッション2: Realization～我を知る～

自分自身を'もの'に譬え、各々がグループメンバーに対してアピールを行う

セッション3: Researcher～研究者として重要なこと～

講演・パネルディスカッション

伊勢田哲治 (京都大学 文学研究科 准教授)

西成活裕 (東京大学 先端科学技術研究センター 教授)

坂東昌子 (愛知大学 名誉教授、NPO知的人材ネットワークあいんしゅたいん 理事長)

【会場】湘南国際村センター

【参加者】学生110名、教員44名、計154名

平成23年度前学期学生セミナー

【開催日】平成23年4月7日(木)－8日(金)

【内容】在学学生で構成された前学期学生セミナー実行委員が企画した、新入生向けプログラムの実施。今回の学生セミナーでは新入生に生命の設計図ならぬ「研究者の設計図」を考えてもらう機会とした。

テーマ: 「DNA」

プログラム セッション1: Discover～総研大生がもつ「つながり」を見つける～

セッション2: Network～研究の目標や将来の夢に近づくために必要となるNetwork
を考える～

講師: 土居 浩(ものづくり大学)

横山広美(東京大学)

セッション3: Announce～プレゼンテーションをする上で、必要なこと・注意すべき点を考える～

【会場】湘南国際村センター

【参加者】学生84名、教員34名、計118名

平成24年度前学期学生セミナー

【開催日】平成24年4月12日(木)－13日(金)

【内容】在学学生で構成された前期学生セミナー実行委員が企画した、新入生向けプログラムを実施した。学生セミナー実行委員は、自分たちで学際交流、地域交流、社会発信をテーマに、プロジェクトを企画し、その経験を学生セミナー企画に反映した。

テーマ 「つながる Connect and spread widely」

プログラム セッション1：地域を学ぶ、地域に学ぶ～地域交流～

ワークショップ

セッション2：あなた Color、私 Color～研究者同士の分野を越えた交流～

ワークショップ

セッション3：To Spread Yours～社会発信～

講演 平井宏典(共栄大学)

縣 秀彦(国立天文台)

【会 場】学融合推進センターおよび共通棟2階講義室

【参加者】学生83名、教員18名、計101名

平成 16 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 16 年 10 月 12 日(火)～10 月 13 日(水)

【内 容】

テーマ「**Science and society in modern Japan**」

プログラム

講演 1 「History of Science in Japan」

梶 雅範(東京工業大学大学院 社会理工学研究科 助教授)

講演 2 「Technological Development in Japan—Its Continuity between Pre-War and Post - War」

猪木武徳(総研大 国際日本研究専攻 教授)

講演 3 「Foreign Researchers in Japan 」

Nigel Collier(総研大 情報学専攻 助教授)

フリー・ディスカッション

ポスター／パネルセッション

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 34 名、教員 6 名、計 40 名

平成 17 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 17 年 10 月 13 日(木)～10 月 14 日(金)

【内 容】

テーマ「**Being a researcher in Japan**」

プログラム

講演 1 「日本の宇宙科学について」松本敏雄(宇宙航空研究開発機構(JAXA)名誉教授)

講演 2 “Women in Academics” Sharon TRAWEEK (UCLA 准教授)

講演 3 「日本の大学院生活」勝木健雄(国立遺伝学研究所／総研大卒業生)

フリー・ディスカッション

松本敏雄、Sharon TRAWEEK、勝木健雄、鄭 躍軍

討論 「異文化の中で学ぶ」

ディスカッションリーダー： 鄭 躍軍(地球環境学研究所 助教授)

Panelists:Sebastien DUVAL(情報学専攻学生)

Helim KIM(生命体科学専攻学生)

Takeo KATSUKI(国立遺伝学研究所 PD)

Kazuyuki HIRAI(国立遺伝学研究所 PD)

RAJAN BABU SUGANTHAN(遺伝学専攻学生)

Takafumi MIYAMOTO(遺伝学専攻学生)

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 35 名、教員 13 名、計 48 名

平成 18 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 18 年 10 月 12 日(木)～10 月 13 日(金)

【内 容】

テーマ 「Challenge」

プログラム

講演 1 Lukasz Tedeusz Radosinski (加速器科学専攻大学院生)

講演 2 長谷川 真理子(生命共生体進化学専攻教授)

講演 3 藤澤 肇 (名古屋大学大学院特任教授)

フリー・ディスカッション

水ロケット・アクティビティ

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 59 名、教員 17 名、計 76 名

平成 19 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 19 年 10 月 11 日(木)～10 月 12 日(金)

【内 容】

テーマ 「2007 年 Big Things Start Small」

プログラム

講演 1 太田朋子(国立遺伝学研究所)

フリー・ディスカッション

アフター・ディナー・アクティビティ

講演 2 D. D. Bhawalkar (Raja Ramanna Centre for Advanced Technology)

アクティビティ(鉱石ラジオ作成)

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 36 名、教員 17 名、計 52 名

平成 20 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 20 年 10 月 9 日(木)～10 月 10 日(金)

【内 容】

テーマ 「Together in Harmony - Communication, Dedication and Motivation -」

プログラム

講演 1 Abdus Samad(Plant Genetic Resources Center)

インタラクティブ・アクティビティ

講演 2 稲邑 哲也 (情報科学専攻 准教授)

天体観測

ナイトアクティビティ

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 35 名、教員 23 名、計 58 名

平成 21 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 21 年 10 月 8 日(木)～10 月 9 日(金)

【内 容】

テーマ 「UNITY と IDENTITY」

プログラム

講演 1 「科学者になること、科学者であること」

Peter Somogyi (MRC 解剖学的神経薬理学ユニット長)

フリー・ディスカッション 「UNITY と IDENTITY」

ナイト・アクティビティ 「折り紙」「肖像画」

講演 2 「世界におけるスペイン語」

Antonio Ruiz Tinoco (上智大学外国語学部教授)

インタラクティブ・アクティビティ

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 35 名、教員 17 名、計 52 名

平成 22 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 22 年 10 月 7 日(木)～10 月 8 日(金)

【内 容】

テーマ 「Knowledge and Imagination」

プログラム

講演 1 Friedrich Paul Cilliers (University of Stellenbosch, South Africa)

フリーディスカッション

ナイトアクティビティ

講演 2 北川 源四郎 (統計数理研究所長)

インタラクティブ・アクティビティ

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 38 名、教員 15 名、計 53 名

平成 23 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 23 年 10 月 13 日(木)～10 月 14 日(金)

【内 容】

テーマ 「Dream to Discovery」

プログラム

講演 1 標葉隆馬(生命共生体進化学専攻助教)

講演 2 杉田 圭(ドイツ GSI(重イオン科学研究所)研究員)

講演 3 寺田吉孝(比較文化化学専攻教授)

Interdisciplinary Workshop

Cultural Workshop : Talk about your culture

【会 場】葉山キャンパス及び湘南国際村センター

【参加者】学生 27 名、教員 16 名、計 43 名

平成 24 年度後学期学生セミナー

【開催日】平成 24 年 10 月 11 日(木)～10 月 12 日(金)

【内 容】

テーマ 「Follow your rainbow」

プログラム

講演 1 BYRNES、Tim (国立情報学研究所 助教)

講演 2 SPEARS、Scott (國學院大學 外国語文化学科 助教)

講演 3 八巻 恵子(東京国際大学 国際関係学部 客員講師)

Interdisciplinary Workshop

Cultural Workshop : Talk about your culture

(単位取得のためには、この後に続く『日本文化を学ぶコース』(於・葉山町及び鎌倉市内の文化施設)まで含めて参加することを求めた)

【会 場】総研大葉山キャンパス

【参加者】学生 35 名、教員 5 名、計 40 名

資料Ⅳ. アンケート集計
 (平成 16 年度前学期)
 【交流に関するアンケート】

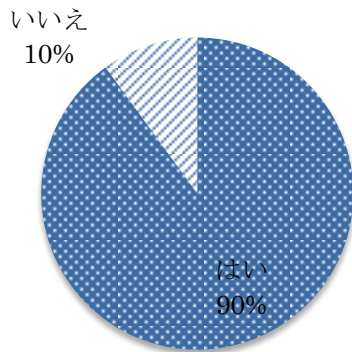


図 1 今後も他の専攻の学生と連絡をとりたい

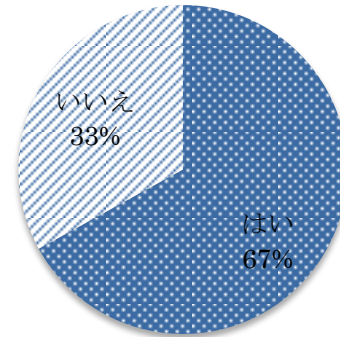


図 2 今回入学した同級生とメールリストを作りたい

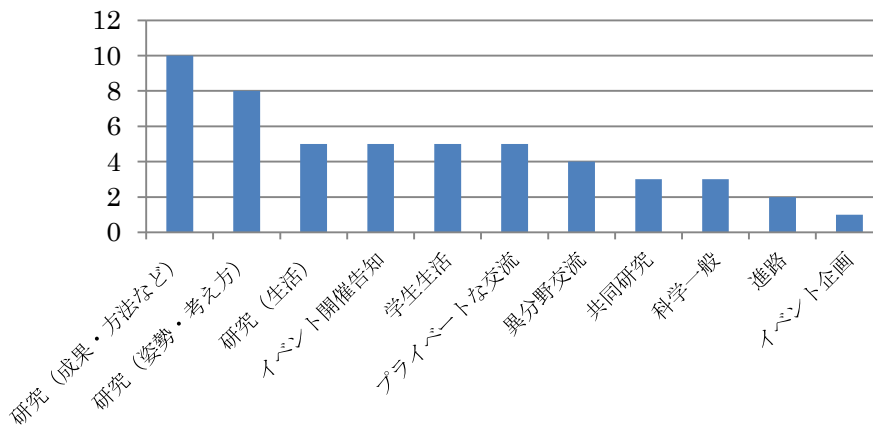


図 3 メールリストはどのような内容について話し合いたいと考えていますか？

(平成 18 年度前学期)
 【交流に関するアンケート】

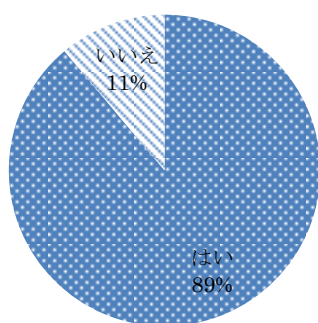


図 1 今後も他の専攻の学生と連絡をとりたい

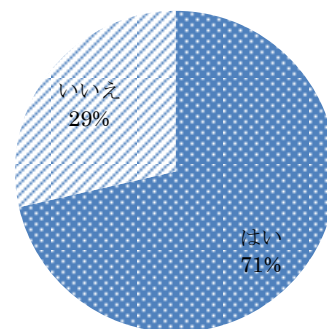


図 2 今回入学した同級生とメールリストを作りたい

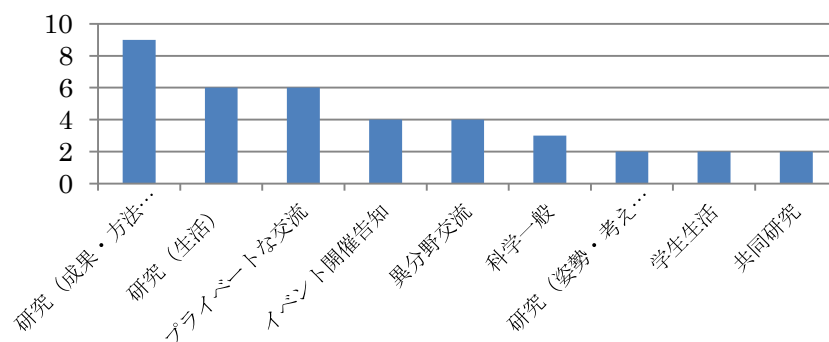


図3 メールリストではどのような内容について話し合いたいと考えていますか？

(平成 21 年度前学期)

学生セミナーに参加した新入生には、アンケートとレポートを課題とした。

レポート提出者は新入生 66 名(在校生 4 名、5 年一貫 1 年生 40 名、5 年一貫 3 年生 22 名)、在校生 2 名で、専攻内訳は下記のようになっている(表 1)。

表 1 レポート提出者の専攻内訳

| | | |
|----------------|-------------|---|
| 文化科学研究科 | 地域・比較文化学専攻 | 1 |
| | 国際日本研究専攻 | 1 |
| | 日本文学研究専攻 | 2 |
| 物理科学研究科 | 機能・構造分子科学専攻 | 8 |
| | 核融合科学専攻 | 2 |
| | 宇宙科学専攻 | 6 |
| | 天文科学専攻 | 3 |
| 高エネルギー加速器科学研究科 | 加速器科学専攻 | 1 |
| | 素粒子原子核専攻 | 6 |
| 複合科学研究科 | 統計科学専攻 | 3 |
| | 情報学専攻 | 7 |
| | 極域科学専攻 | 3 |
| 生命科学研究所 | 基礎生物学専攻 | 5 |
| | 遺伝学専攻 | 7 |
| | 生理科学専攻 | 5 |
| 先導科学研究科 | 生命共生体進化学専攻 | 6 |
| 文化科学研究科 | 地域・比較文化学専攻 | 1 |
| | 国際日本研究専攻 | 1 |
| | 日本歴史研究 | 0 |
| | 日本文学研究専攻 | 2 |
| 物理科学研究科 | 機能・構造分子科学専攻 | 8 |
| | 核融合科学専攻 | 2 |
| | 宇宙科学専攻 | 6 |
| | 天文科学専攻 | 3 |
| 高エネルギー加速器科学研究科 | 加速器科学専攻 | 1 |
| | 素粒子原子核専攻 | 6 |
| 複合科学研究科 | 統計科学専攻 | 3 |
| | 情報学専攻 | 7 |
| | 極域科学専攻 | 3 |
| 生命科学研究所 | 基礎生物学専攻 | 5 |
| | 遺伝学専攻 | 7 |
| | 生理科学専攻 | 5 |
| 先導科学研究科 | 生命共生体進化学専攻 | 6 |

<アンケート結果>

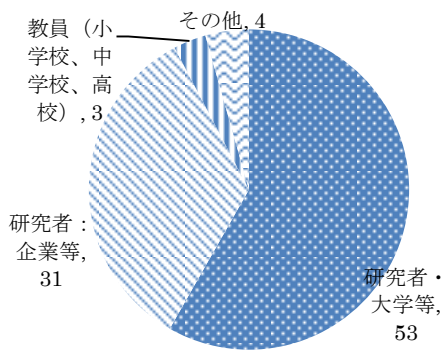


図1 将来、就きたい職業はなんですか？

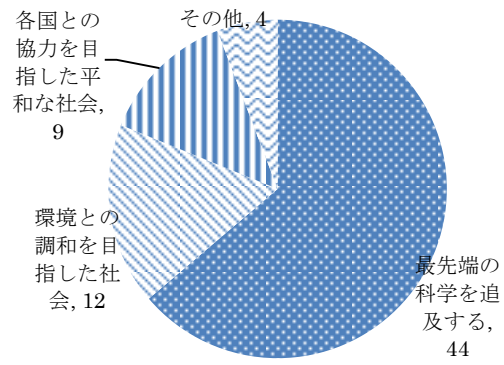


図2 将来の夢

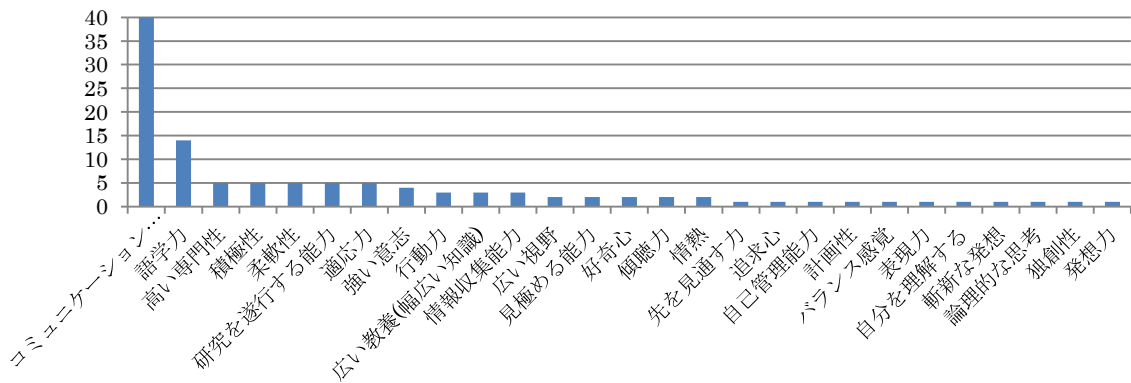


図3 国際的に活躍する研究者にとって必要な能力とは何でしょうか？

(平成22年度前学期)

学生セミナーに参加した新生には、学生セミナー時に参加に関するアンケートに回答してもらった。アンケート回答者は57名であった。新生のうち、5年一貫性の1年生は29名、3年生は28名であった。専攻内訳は下記のようになっている(表1)。今年は生命系の専攻の入学者が多く、参加者も多くなっている。参加者の参加動機は図1の通りである(図1)。

表1 参加者の専攻内訳

| | | |
|----------------|-------------|----|
| 文化科学研究科 | 地域・比較文化化学専攻 | 3 |
| | 国際日本研究専攻 | 2 |
| | 日本文学研究専攻 | 2 |
| 物理科学研究科 | 機能・構造分子科学専攻 | 2 |
| | 核融合科学専攻 | 2 |
| | 宇宙科学専攻 | 4 |
| 高エネルギー加速器科学研究科 | 加速器科学専攻 | 1 |
| | 素粒子原子核専攻 | 5 |
| 複合科学研究科 | 統計科学専攻 | 3 |
| | 極域科学専攻 | 1 |
| | 情報科学専攻 | 1 |
| 生命科学研究科 | 遺伝学専攻 | 6 |
| | 基礎生物学専攻 | 7 |
| | 生理科学専攻 | 10 |
| 先端科学研究科 | 生命共生体進化学専攻 | 8 |

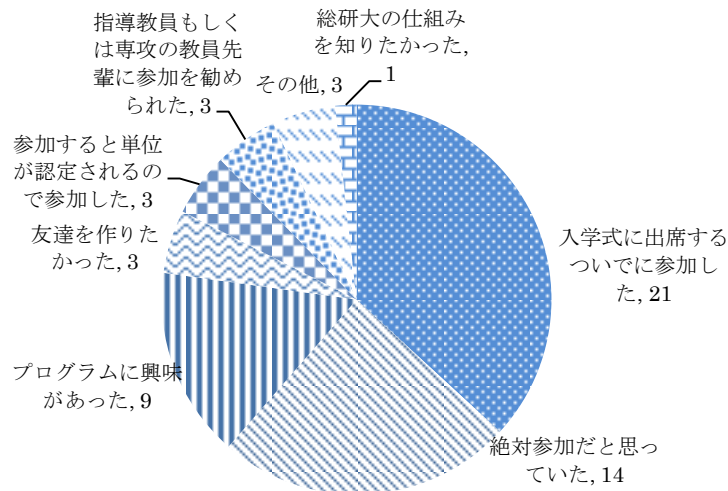


図1 参加者の参加動機

目的があって参加したというより、「絶対参加だと思っていた」、「入学式に出席するのついでに参加した」という受け身の理由が上位を占めた。その他の3人は、「他分野の研究者と交流をしたかった」という理由であった。学生セミナーの事前事後で同じ質問項目を使って学生の研究に関する意識調査を行った(表2)

表2 学生セミナー事前事後意識調査

| | 事前 | 事後 | t 値 |
|---|------|------|-------------------|
| 他分野の研究者や学生と共同研究に関心がある | 3.27 | 3.43 | 1.74 [†] |
| 研究者として成長するためには専門分野の研究活動に集中するべきだ | 3.12 | 2.55 | 4.12** |
| 他分野の研究者や学生の研究を知ることは、自分の研究を発展させるきっかけになる | 3.38 | 3.47 | 0.85 |
| 学会や専攻の中でしか研究が発展するような議論はできない | 1.88 | 1.63 | 2.36* |
| 直接自分の研究に関係ない他分野の研究を知っても、自分の研究の発展にはつながらない | 1.62 | 1.56 | 0.44 |
| 研究者として成長するためには、専門的研究能力とは別に、コミュニケーションスキルやマネジメント能力といった、研究遂行のための能力を獲得する必要がある | 3.7 | 3.74 | 0.42 |
| 研究を進める上で必要な要素を既に分かっている | 1.88 | 2.28 | 4.22** |
| これからどうやって研究を進めていくべきか分かっていない | 2.53 | 2.51 | 0.19 |
| 研究交流には個人的つながりが必要だ | 3.31 | 3.49 | 1.58 |

その結果、「他分野の研究者や学生と共同研究に関心がある」という共同研究に対する興味が増え、一方で「研究者として成長するためには専門分野の研究活動に集中するべきだ」という自分の研究分野にのみ固執する態度が低下している。さらに「学会や専攻の中でしか研究が発展するような議論はできない」と言う、専門家集団間のみの研究発展に対する見方も否定的になっている。一方で、この2日間で「研究を進める上で必要な要素を既に分かっている」という意見が増え、研究遂行のための知識をこのセミナーで獲得したものだと考えられる。

自由記述においても、「雰囲気は想像していた以上によかった」、「初めに予想していたよりは面白かったです」と、セミナーを高く評価しており、参加者の期待以上の内容になっていたのではないかと考えられる。「他分野の方々とグループディスカッションができたのは、よい刺激をもらえてよかったですと思います。先生方のご講演も、これから研究者となる上でとても勉強になりました。ありがとうございました。」といった意見が挙がり、本事業の成果が今後の学生生活にも活かされる可能性が示唆された。

一方「セッションはとても自分にとって有意義なものでした。がスケジュールが詰まり過ぎていたので、疲れてしまい、後半集中力を欠いてしまいました。」とスケジュールに対する課題が挙がっていた。またはちまきをして臨んだ最後のセッションに関しては、中国人留学生への配慮が足りなかったのではという指摘があった。

学生セミナーはたった2日間という短いプログラムでありながら、参加者の意識改革に大きく作用していることが明らかになった。今後はその質を保ちながら、より参加者の視点に立ったプログラム作りが課題になってくる。また学生セミナーの効果についても、その効果の中長期的影響を見ていく必要があるだろう。

(平成 23 年度前学期)

=当日概要=

専攻を超えて、学生同士知り合いを作ってもらおうという趣旨の下、「面白い人 Discover」というワークショップが行われた。ランダムに配置された席に着くと、ゼッケンが渡されます。そこに、「研究者となることに決めたターニングポイント」と「これから先どんな研究者になりたいか」を記入し後、グループでそのゼッケンに記入されたことを手掛かりに、話し合う。席替えを繰り返し、多くの学生と知り合った。

Network は、自分の夢につながるためのネットワークについて考えるセッション。自分の夢につながるネットワーク図を描いた後、ものづくり大学の土居浩先生と東京大学の横山広美先生にキャリアにつながるネットワークについての講演を聞いた。その後、自分たちのネットワーク図を見返しながら、総研大の全学 教育担当の先生方とフリーディスカッションを行った。

Announce のセッションでは自分たちの研究を他者にどう伝えるか、まず各班にお題が与えられる(例：家族を説得するための研究紹介、サイエンスカフェでのつかみの5分間など)。それぞれが、自分たちのお題にあったターゲットに対しての説明の仕方を考え、グループの中で、一人の研究をピックアップし、その研究を伝える工夫を班員全員で行う。その後、班ごとに自分たちの研究プレゼンを行った。参加者は多くの総研大の仲間を見つけ、研究者になるためのヒントを見つけることができた。

表 1 レポート提出者の専攻内訳

| | | |
|----------------|-------------|---|
| 文化科学研究科 | 地域・比較文化学専攻 | 1 |
| | 国際日本研究専攻 | 1 |
| 物理科学研究科 | 機能・構造分子科学専攻 | 1 |
| | 天文科学専攻 | 5 |
| | 宇宙科学専攻 | 1 |
| 高エネルギー加速器科学研究科 | 加速器科学専攻 | 1 |
| | 素粒子原子核専攻 | 6 |
| 複合科学研究科 | 統計科学専攻 | 2 |
| | 極域科学専攻 | 2 |
| | 情報科学専攻 | 5 |
| 生命科学研究科 | 遺伝学専攻 | 8 |
| | 基礎生物学専攻 | 3 |
| | 生理科学専攻 | 6 |
| 先導科学研究科 | 生命共生体進化学専攻 | 4 |

<アンケート結果>

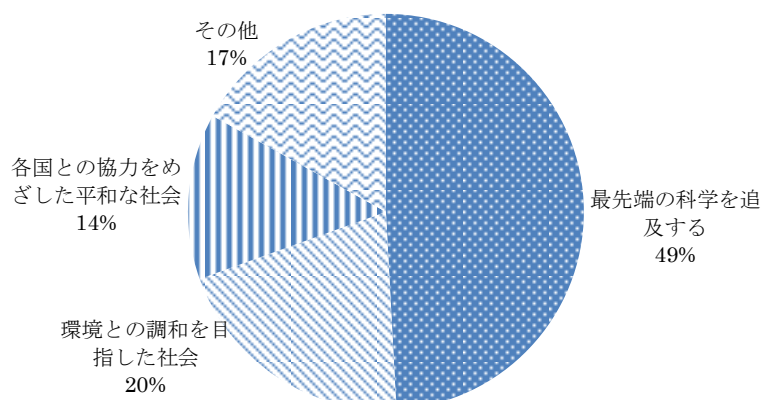


図 1 将来の夢

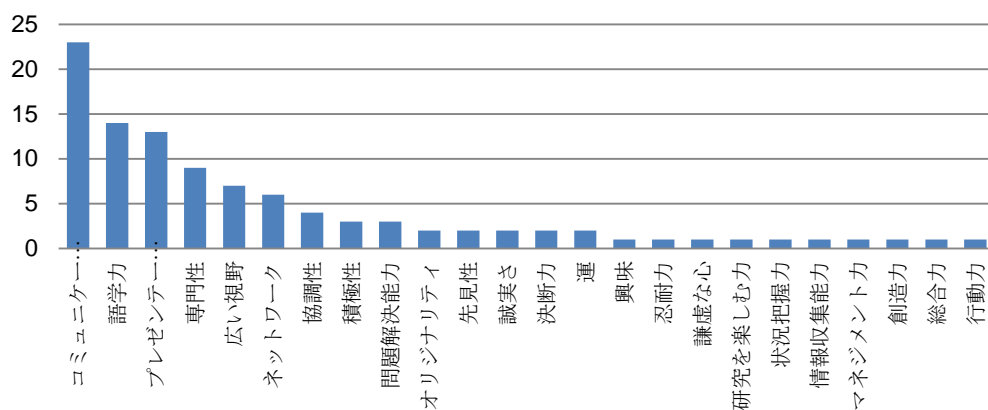


図2 国際的に活躍する研究者にとって必要な能力

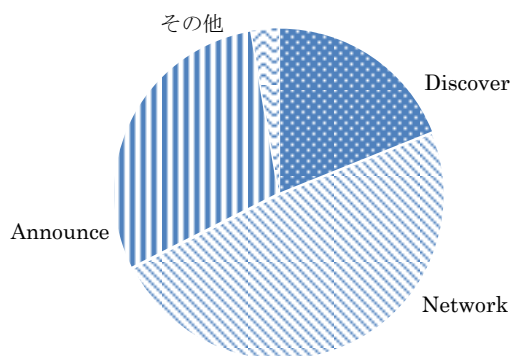


図3 印象に残ったプログラム

(平成 24 年度前学期)

学生セミナーに参加した新生には、アンケートとレポートを課題とした。

<課題 1>研究者になるために何が必要なのか、学生セミナーを通して考えたことを具体的なセッションの内容と関連レポート提出者は新生 47 名 (5 年一貫 1 年生 27 名、5 年一貫 3 年生 20 名)、在校生 2 名で、専攻内訳は下記のようになっている (表 1)。

表 1 レポート提出者の専攻内訳

| | | |
|----------------|-------------|----|
| 文化科学研究科 | 地域・比較文化化学専攻 | 1 |
| | 国際日本研究専攻 | 2 |
| | 日本歴史研究 | 1 |
| | 日本文学研究専攻 | 1 |
| 物理科学研究科 | 機能・構造分子科学専攻 | 13 |
| | 核融合科学専攻 | 4 |
| | 宇宙科学専攻 | 3 |
| | 天文科学 | 6 |
| 高エネルギー加速器科学研究科 | 物質構造科学専攻 | 1 |
| | 素粒子原子核専攻 | 3 |
| 複合科学研究科 | 統計科学専攻 | 2 |
| | 極域科学専攻 | 3 |
| 生命科学研究所 | 基礎生物学専攻 | 3 |
| | 生理科学専攻 | 9 |
| 先導科学研究科 | 生命共生体進化学専攻 | 1 |

<アンケート結果>

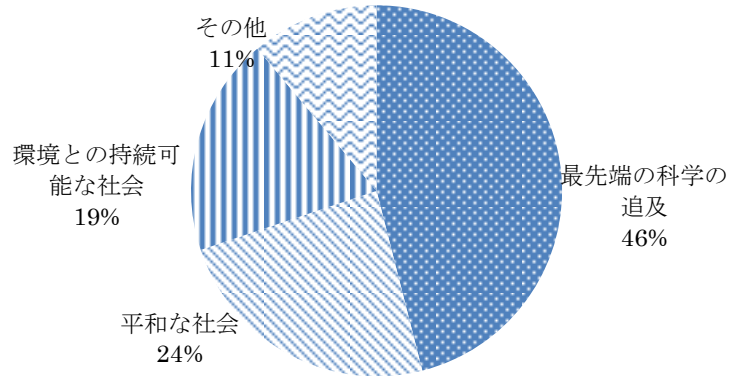


図1 学生の将来の夢

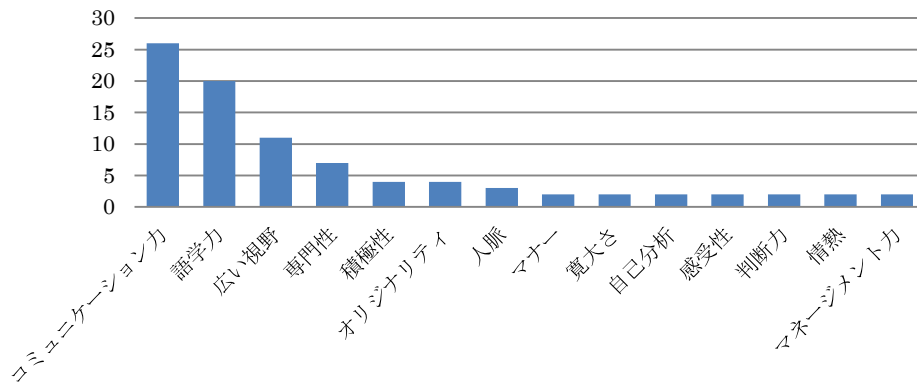


図2 国際的な研究者に必要な能力とは

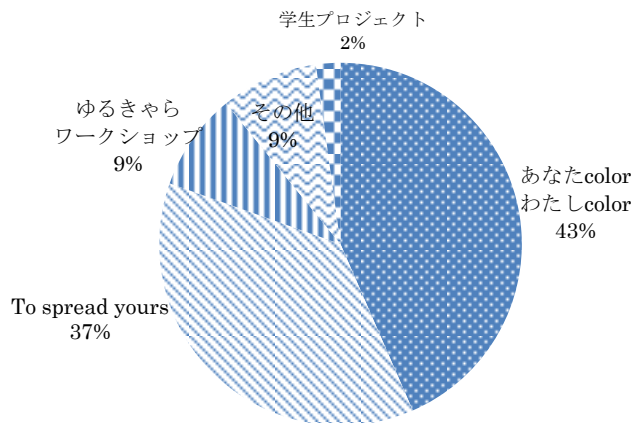


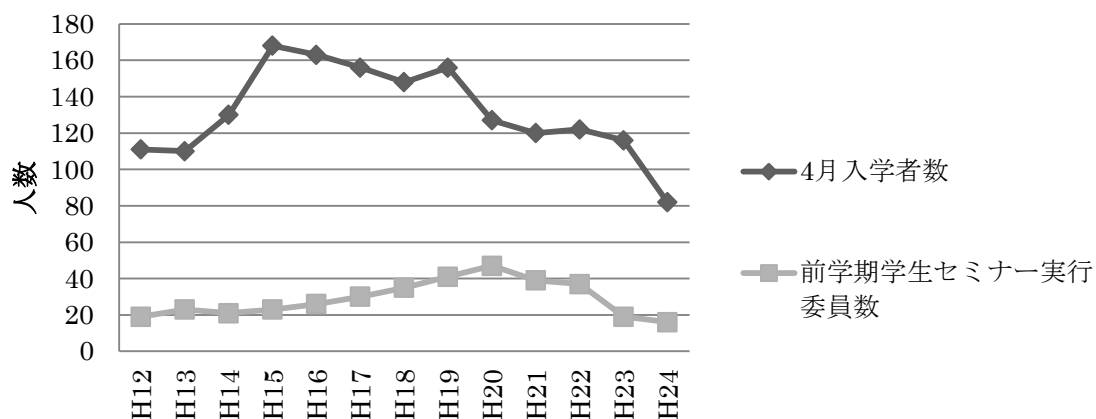
図3 印象に残ったプログラム

表2 身についたこと、考えたこと：このセミナーで受講した学生がどの場面で、どのようなスキルを身につけたと思っているかについてまとめたもの

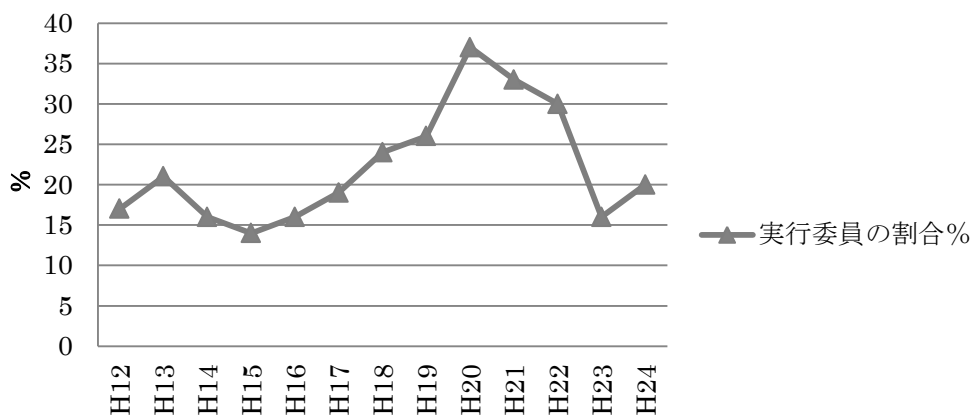
| 講義スタイル | 講義 | ワークショップ |
|--------|--|--|
| 項目 | <ul style="list-style-type: none"> ・人とのつながり ・社会との関係 ・マネジメントの必要性 ・<u>人脈の重要性</u> | <ul style="list-style-type: none"> ・<u>広い視野</u> ・考えを共有することで新しいアイデアが生まれる ・アプローチの多様性 ・<u>コミュニケーション能力</u> ・危機感 ・<u>交流する楽しさ</u> ・説得の方法 ・チームワークの重要性 ・<u>地域連携</u> |

資料V. 学生セミナー実行委員数の推移

新入生数と前学期学生セミナー実行委員数の推移

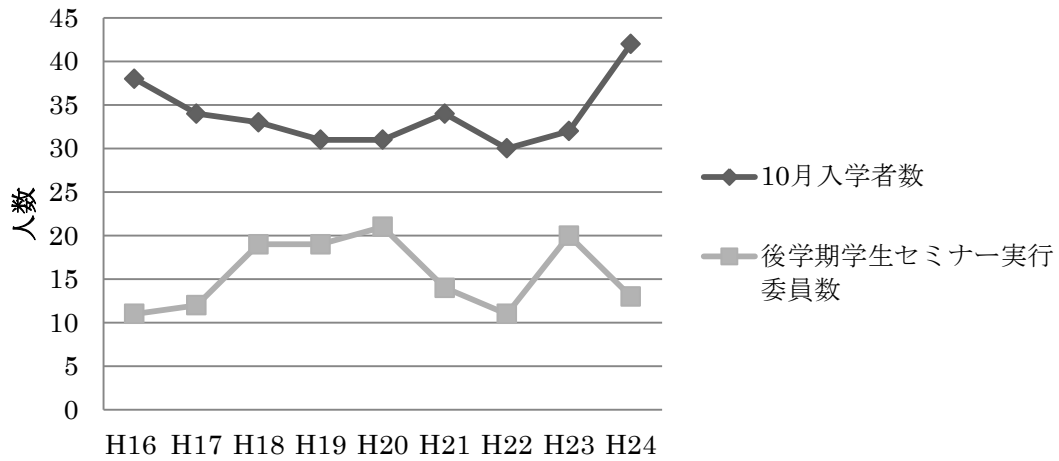


前学期学生セミナー実行委員の割合の推移

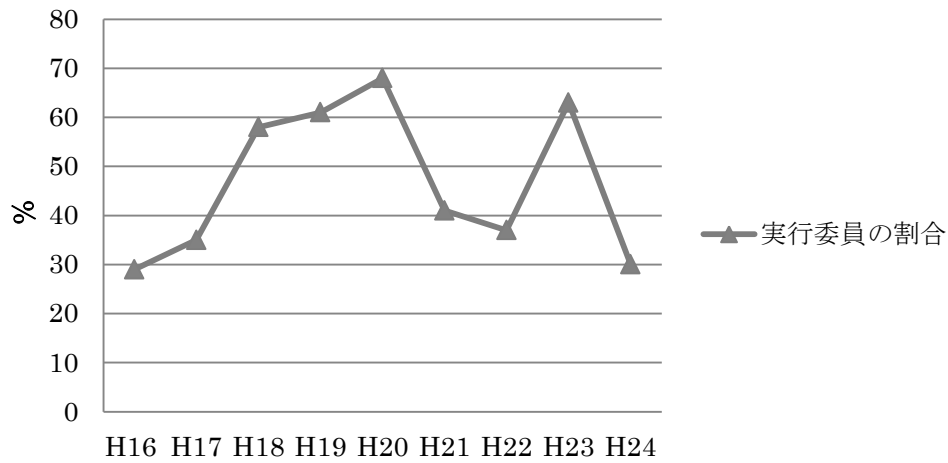


| 委員会開始時 | セミナー実施時 | 4月入学者数 | 実行委員数 | 実行委員の割合(%) | 備考 |
|--------|---------|--------|-------|------------|--------|
| 平成11年度 | 平成12年度 | 96 | 19 | 20 | |
| 平成12年度 | 平成13年度 | 111 | 19 | 17 | |
| 平成13年度 | 平成14年度 | 110 | 23 | 21 | |
| 平成14年度 | 平成15年度 | 130 | 21 | 16 | |
| 平成15年度 | 平成16年度 | 168 | 23 | 14 | |
| 平成16年度 | 平成17年度 | 163 | 26 | 16 | 岩瀬着任 |
| 平成17年度 | 平成18年度 | 156 | 30 | 19 | 専攻枠を外す |
| 平成18年度 | 平成19年度 | 148 | 35 | 24 | |
| 平成19年度 | 平成20年度 | 156 | 41 | 26 | |
| 平成20年度 | 平成21年度 | 127 | 47 | 37 | |
| 平成21年度 | 平成22年度 | 120 | 39 | 33 | 奥本着任 |
| 平成22年度 | 平成23年度 | 122 | 37 | 30 | 山田着任 |
| 平成23年度 | 平成24年度 | 116 | 19 | 16 | PBL導入 |
| 平成24年度 | 平成25年度 | 82 | 16 | 20 | |

新入生数と後学期学生セミナー実行委員数の推移



後学期学生セミナー実行委員の割合の推移



| 委員会開始時 | セミナー実施時 | 10月入学者数 | 実行委員数 | 実行委員の割合(%) | 備考 |
|--------|---------|---------|-------|------------|----|
| 平成16年度 | 平成17年度 | 38 | 11 | 29 | |
| 平成17年度 | 平成18年度 | 34 | 12 | 35 | |
| 平成18年度 | 平成19年度 | 33 | 19 | 58 | |
| 平成19年度 | 平成20年度 | 31 | 19 | 61 | |
| 平成20年度 | 平成21年度 | 31 | 21 | 68 | |
| 平成21年度 | 平成22年度 | 34 | 14 | 41 | |
| 平成22年度 | 平成23年度 | 30 | 11 | 37 | |
| 平成23年度 | 平成24年度 | 32 | 20 | 63 | |
| 平成24年度 | 平成25年度 | 42 | 13 | 30 | |

資料VI. ディスカッション用資料の例

平成 18 年度前学期の学生セミナーで用いたもの

フリーディスカッション

インターネットという、新たなコミュニケーションの道具を手に入れた今、人と向き合い「対話」するという事の位置づけは、私たちの中で変化しているでしょうか。コミュニケーションツールが進化している時代の中において、相手を理解し、そして自分を理解してもらうことで築いていく人と人の関係は良くなっているでしょうか。

私たちの世代の学生程、コミュニケーションのあり方を問われ、この問題を乗り越える事を求められる時代はなかったことでしょう。

1日目夕食後の企画は新入生の皆さんが、リラックスした雰囲気の中で、他の分野の人と自分の考えを提示し、他の人の意見を理解するという、当たり前にはできそうでなかなかできない事を是非、この機会に楽しんでもらおうと、始まったものです。

他の講演等の企画とは雰囲気は全く違います。肩肘張らず、飲み物を片手に、楽しんで下さい。
※以下はイベントで話題にする内容です。空欄に埋めるのに面白い言葉を考えて話します。

今から7年後、皆さんは大きな会場に集まりました。その会場には企業の人や大学の教員、その他以前研究を経験した人が多くの分野にわたり集まっていました。

会議の趣旨は_____問題から_____問題までの、社会で問題となっている事をできるだけ様々な知識のもとに解決するためのプロジェクトの立ち上げでした。

産学官だけでなく一般の人からも広く公募し、公募内容から第一次選考に残ったチームがこの会場に集められました。

皆さんは入学式の縁でチームを組みこのプロジェクトに応募し見事に第一次選考に選ばれました。

その応募した内容とは入学式の時にすでにそれぞれが知っていた

_____と
_____という

あまり関係がないと思われる分野の意見から、

_____ことにより
_____を解決するというものでした。

すでに産学連携の失敗（他分野との連携の難しさ）も新聞等で数多く知っていたため、皆さんのチームでは

_____ということに気を配っていました。

その点が高く評価され見事に_____を得ることができました

Free discussion

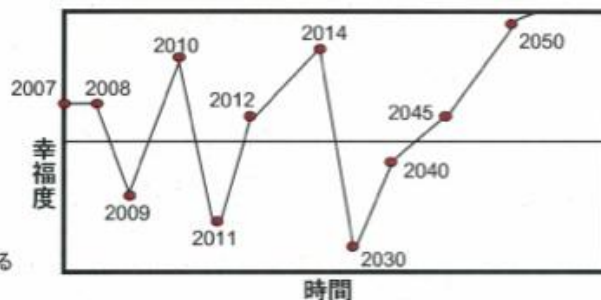
Section.2 挫折～立ちはだかる壁～

あなたは夢という漠然とした想像に縛られてはいないか。不透明で理想的な未来しか想像できなければ、大きな壁と遭遇した場合に逃げ出す可能性が高く、また過去に捕らわれれば前には進めずに苦しみは倍化する。現実的な未来と向き合うことで、立ちはだかる壁を越える術を身につけることが出来る。困難を乗り越え、人やモノに愛を捧げることの出来る研究者は偉大である。そこで新入生の皆様に、現在から未来の自分にどんな困難が待ち受けているか、その困難をどのように乗り越えるのかを考えていただく。そしてそれを発表することで多くの人と苦しみを分かち合い、困難という壁を乗り越える喜びを感じていただきたい。

●プログラム説明●

1. 縦軸に幸福度、横軸に時間と書かれたグラフ用紙をお配りするので、現在を出発点として、今後の苦労とそれを乗り越える自分をイメージして折れ線グラフを書いてください(原則として2度以上、挫折を味わうように設定してください)。
2. 折れ線グラフの各点について、その時間と、設定した幸福度に対応した出来事をグラフの下の記述部分に記述してください。(以下に1, 2の例題を示します)

例題



2007年: やる気と不安の中、総研大の入学式を迎える

2008年: 新鮮且つ高度な環境下で研究に打ち込む

2009年: 科学の複雑さと自分自身の知識不足故に研究が滞り、前に進めなくなってしまう

2010年: 地道な努力により知識を補い、独自の理論を提唱し認められる

2011年: 人間関係のもつれから不登校となり、博士論文が提出できず卒業延期となる

2012年: 愛すべきものからの支え、また偉大な先生との出会いにより奮起し、博士論文を完成させ受理されて総研大を卒業する

2014年: 2年間のポストドク時代を経て、研究所の助手となる

2030年: 自分の開発した装置が突如故障し、研究所に大きな損害を与えて自ら辞職し、多くの研究仲間からの信頼を失う

2040年: 飲食店でアルバイト中に、学生時代に提唱した理論に修正を加えた画期的なアイデアを思いつく

2045年: 昔の研究所からの友人の助けを借りながら、理論を実験により立証する

2050年: この理論が世界中から認められ、科学に対して大きな貢献をする

Ⅶ. 学生セミナー実行委員会の概要と目的(平成 23 年度)

平成 24 年度前学期学生セミナー 実行委員会

(目的) 総合研究大学院大学(総研大)では、主体的活動を通して研究者に必要なスキルを獲得するためにいくつかの教育事業を行っている。研究科・専攻を超えて学生同士で話し合い、入学式当日開催される学生セミナーを作り上げる学生セミナー実行委員会活動はその中の一つである。

実行委員会は新入生に「ネットワークの必要性」「他者とのコミュニケーションの難しさ」を意識させるような企画を行い、実施することを目的としている。

また、総研大生としてのアイデンティティの育成のために各専攻(各基盤)を知ることが企画立案の際には組み入れる。

結果概要

前学期学生セミナー実行委員は 19 名であった。

今年度より、前学期実行委員会にプロジェクトベースドラニングを取り入れた。各プロジェクトの活動人数を絞り、さらにプロジェクトごとに 1 名のセンター事業教員を配置し、プロジェクト活動を監督・支援していくという形に改善した。また、プロジェクト制の導入により、学生間、学生と教員間の連絡調整が密になり、各プロジェクトの企画実施において、学生メンバーの意見を色濃く反映することができた。

- 5 月 第一回プロジェクト全体会議 参加プロジェクト決定
- 5~10 月 随時 プロジェクト活動
- 10 月 第二回プロジェクト全体会議 プロジェクトの中間報告
- 10~1 月 随時 プロジェクト活動
- 1 月 第三回プロジェクト全体会議 プロジェクト実施報告書作成
プロジェクトごとの学生セミナーにおける発表スケジュールの決定
- 1~4 月 学生セミナー発表の準備
- 4 月 12、13 日 平成 24 年度 学生セミナー

結果報告詳細

①学際チーム：12 月 10、11 日全国の大学院生交流会を開催(企画委員：総研大生、奈良先端大生、北陸先端大生)

②地域連携チーム：葉山地域について調査を行い、新入生用にワークショップを作成

③サイエンスコミュニケーションチーム：「総研大教員の魅力を伝えるためのエッセイ集」作成

さらに企画を充実させるために前学期学生セミナー実行委員会でワークショップの企画方法やアンケート作成法の講義を行った。また、よりよいセミナーに向けて教員と学生との協力体制を作った。

全体会議 4 回、チーム別会議 3~6 回 スカイプ会議、掲示版(ウエッブ)

さらに学際チームは平成 24 年度に学生企画事業を立ち上げることを決定した。

【目標達成度】

当初予定した目標はほぼ達成した。また、今後は実施した内容を十分に解析する評価を行い、次年度の改善に役立てる予定である。

平成 23 年度の改善点および課題

＜改善点＞従来、学生セミナー実行委員会は、学生が 1 年をかけて専攻を越えた学生同士話し合い、学生セミナーを作り上げるという活動でしたが、大人数で一度に計画し、一度に動くというやり方は学生間のスケジュール調整や意思決定調整の難しさが課題に挙がっていた。また、大人数を一人の教員が監督するのも難しいといった問題があった。

そのため、今年度からはプロジェクト制にして、各プロジェクトの活動人数を絞り、さらにプロジェクトごとに 1 人教員が配置され、活動を監督・支援していくという形に改善しました。プロジェクト制にすることにより、当日の学生セミナーの活動を、話し合いの中でプログラムを企画運営するのではなく、プログラムを企画するための社会活動を行い、その知見を活かしてセミナープログラムを企画した。これにより、セミナー実行委員会の活動自体が社会との実践的課題解決能力を学ぶ場として機能させた。

＜課題＞

学融合推進センター教員は実行委員の自主性を育成するとともに、経験的にコミュニケーション能力を獲得させる機会を提供している。そして実行委員は研究を遂行する上で必要な、他分野の研究者との対話力、社会との対話力、社会への発信力を養うために、コミュニケーション促進プロジェクトを企画運営し、経験的にこれらのコミュニケーション能力を獲得している。

今後は、学生セミナー実行委員会活動で育成されている能力およびその後に影響力についても調査する必要がある。その上で、実行委員会の教育的意義およびその位置づけを明確にする必要がある。

VIII. 学生セミナー実施報告(業務的観点)

VIII-1 平成16年度 教員・事務の業務振り分け

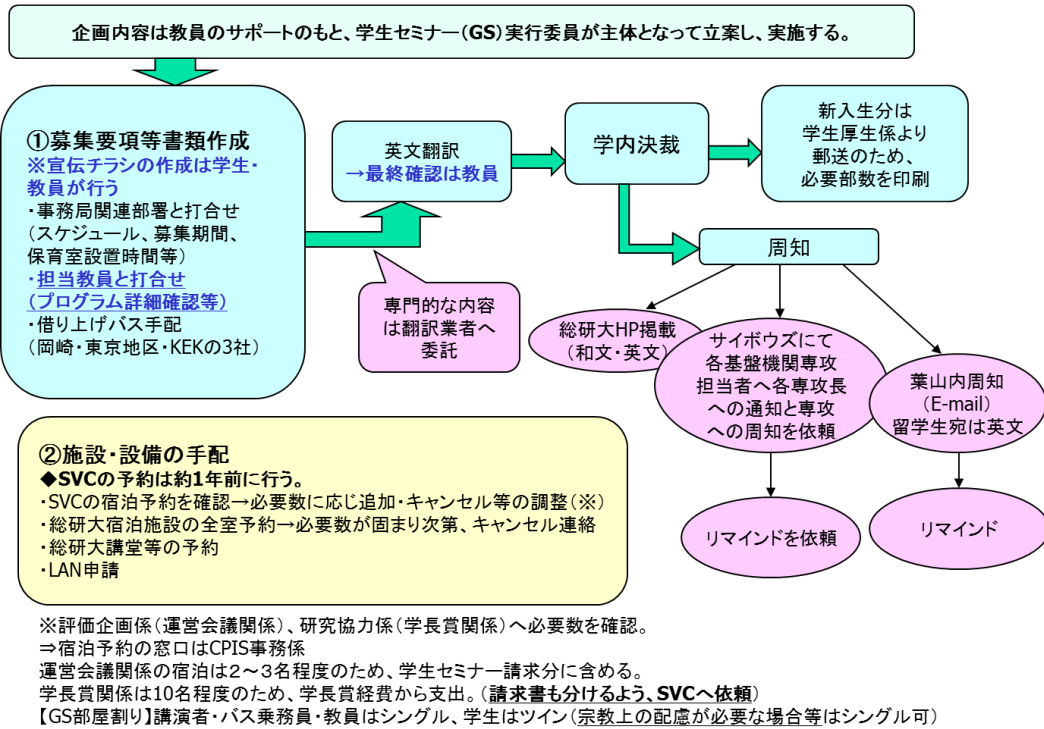
学生セミナー業務分担(2004)

| 業務 | 全学事業 推進室 | 実行委員 (学生) | 学務 | 備考 |
|--------------------------|-------------|--------------|-----|-----------------|
| 湘南国際村センター宿泊施設・研修室仮予約 | ○ | | | |
| 次年度学年暦決定 | | | ○ | |
| 湘南国際村センター宿泊施設・研修室本予約 | | | ○ | |
| 総研大宿泊施設・研修室予約 | ○ | | | |
| 学生セミナー実行委員選出依頼 | ○ | | | |
| 旧委員と新委員の引継ぎ | ○ | ○ | | |
| 実行委員会の日程調整・星取 | ○ | ○ | | |
| 実行委員会会場予約 | | ○ | ○ | |
| 実行委員会会議費支出伺 | | | ○ | |
| 実行委員会開催通知・資料送付 | ○ | | | |
| 実行委員会実施 | ○ | ○ | ○ | |
| 実行委員会、旅費・会場費の精算 | | | ○ | |
| 実行委員会議事要旨作成 | | ○ | | |
| 学生セミナー参加者募集の通知 | ○原稿/学内 | | | 新入生通知 (学生厚生) |
| 参加者取りまとめ(名簿作成) | | | ○ | |
| 参加者名札・領収書 | | | ○ | |
| 昼食手配 | | | ○ | |
| 学生セミナー参加者宛、来学方法通知 | | | ○ | |
| 宿泊部屋割り | | | ○ | |
| 借り上げバス手配 | | | ○ | |
| バス借り上げ伺 | | | ○ | |
| 学生セミナー講師選出・調整(予定および使用機材) | ○ | ○時間 | | |
| 学生セミナー講師依頼 | | | ○ | |
| 講師へ旅費・謝金関係の書類送付 | | | ○ | |
| 外部講師への謝金支出伺 | | | ○ | |
| 外部講師へ御礼の挨拶状送付 | ○ | ○ | | |
| 講師旅費精算 | | | ○ | |
| スタッフ割作成(事務系) | ○ | | ○ | |
| 基盤機関への受付業務の協力依頼 | | | ○ | 参加費の徴 収等 |
| 会議費支出伺(村センター宿泊費・研修室費) | | | ○ | |
| 配布資料等の作成・印刷・袋詰め | ○原稿 | ○ | ○印刷 | |
| 当日受付 | | | ○ | |
| 学生セミナー実施(打合せ・機器操作等) | ○ | ○ | | |
| 各種現金支払い | | | ○ | |
| アンケート・レポートの作成および集計 | ○ | | | |
| 単位履修手続き | | | ○ | |
| 電車来学者の交通費精算 | | | ○ | |

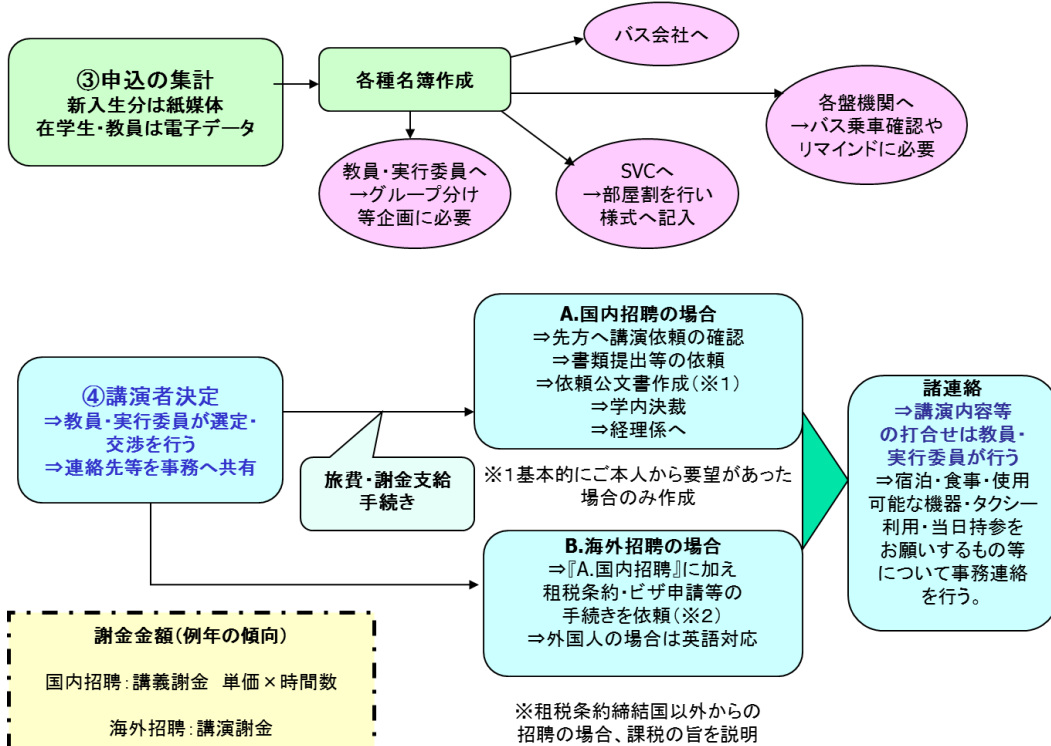
平成24年現在、基本的には上記の振り分けで分担している。

VIII-2 平成 23~24 年度 業務フロー

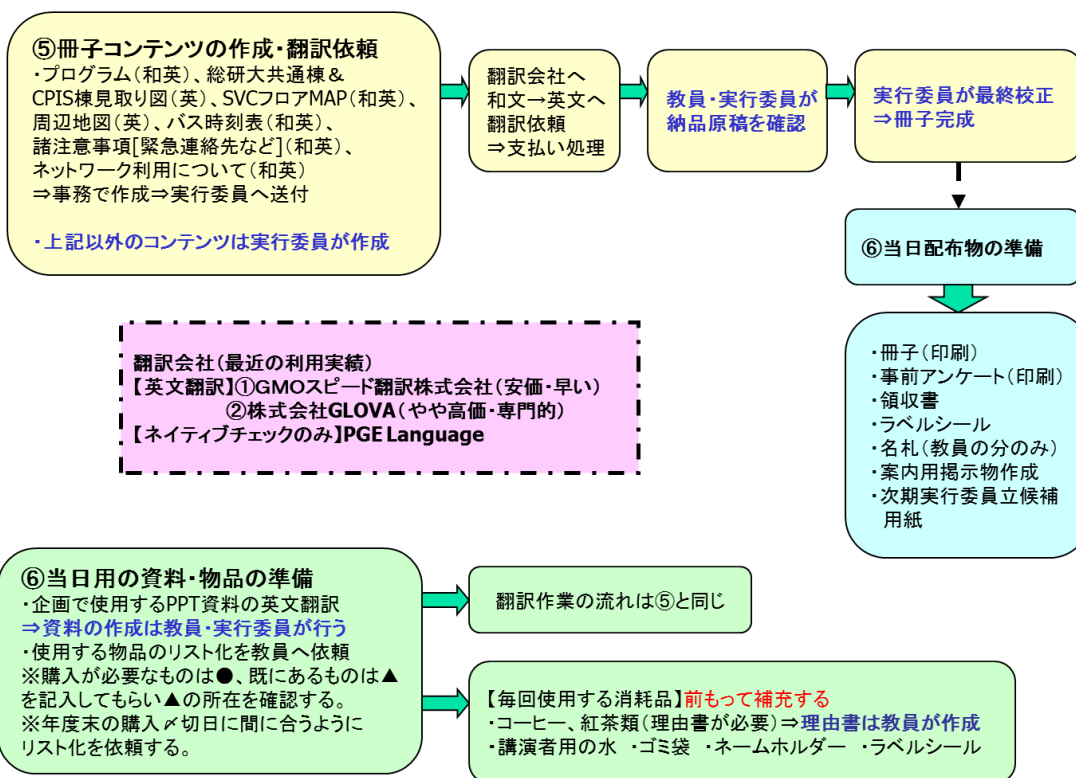
学生セミナー運営業務①(学融合推進センター事務係)



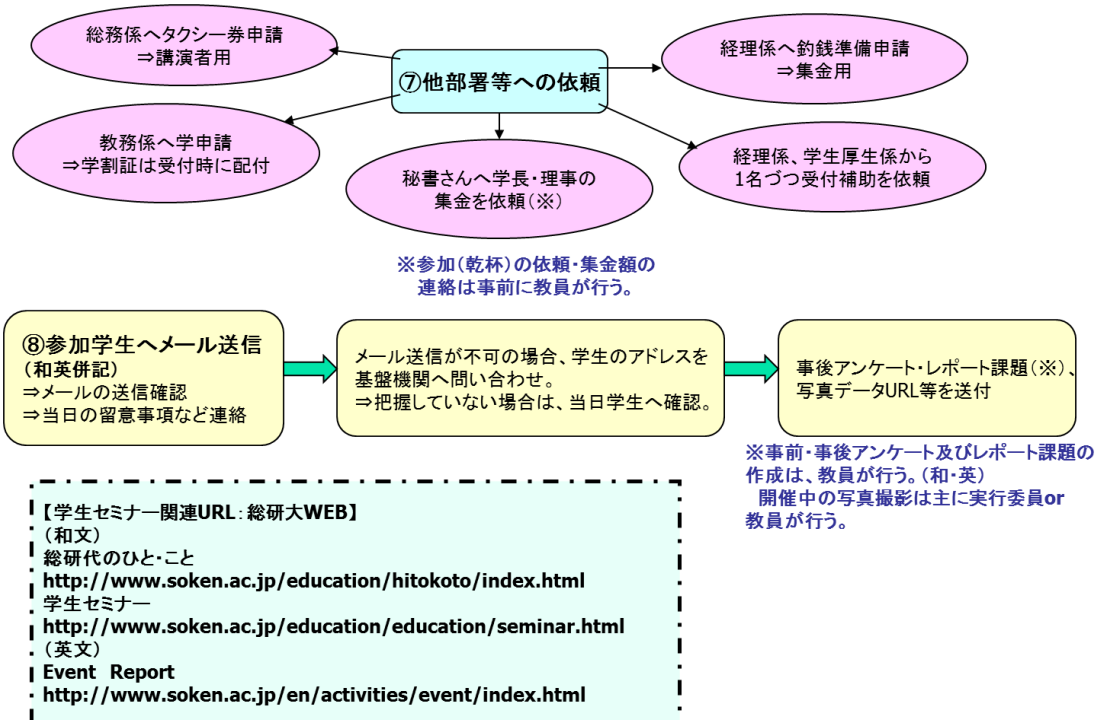
学生セミナー運営業務②(学融合推進センター事務係)



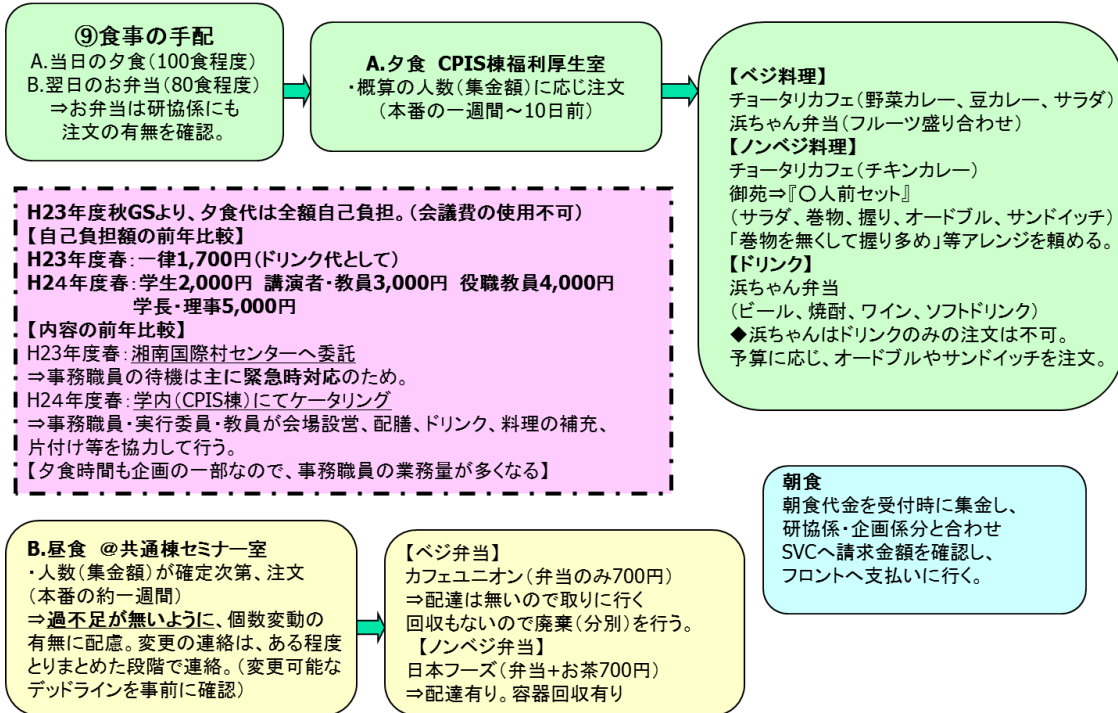
学生セミナー運営業務③(学融合推進センター事務係)



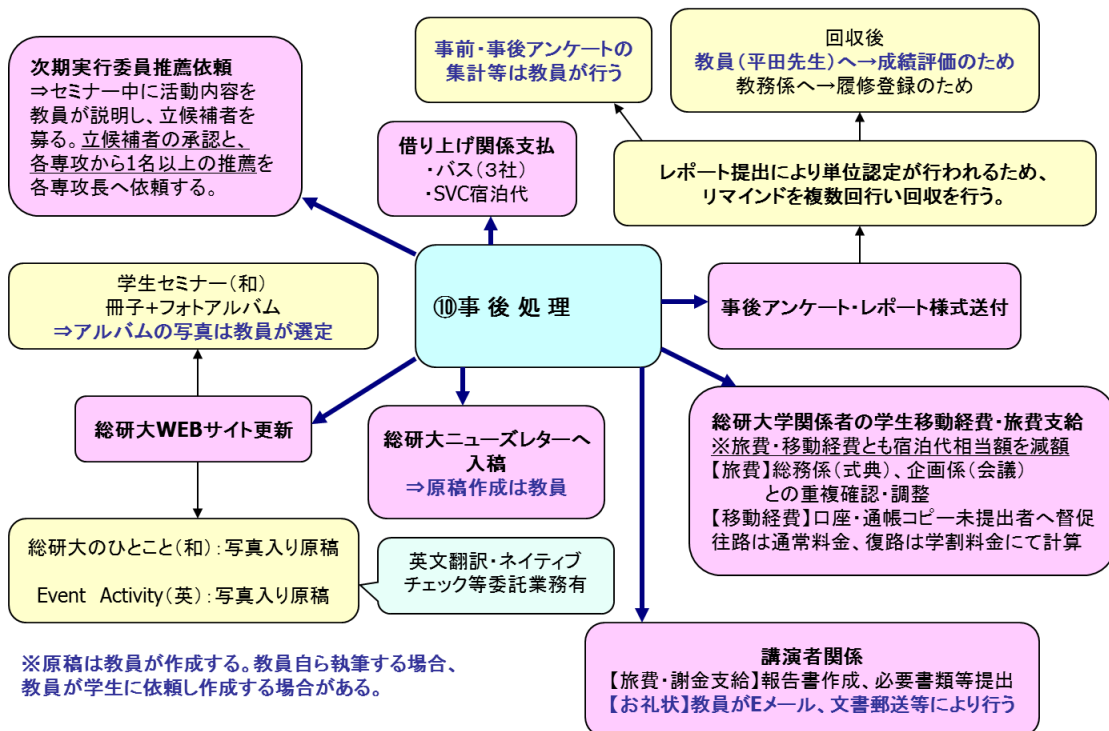
学生セミナー運営業務④(学融合推進センター事務係)



学生セミナー運営業務⑤(学融合推進センター事務係)



学生セミナー運営業務⑥(学融合推進センター事務係)



<教職員の連携について>

学生セミナーの運営について、基本的な分担の方針としては『実行委員のプロジェクト活動、本番のプログラム内容、学生のケア』に関しては教員が担当し、『それに付随する諸々の業務』に関しては学融合推進センター事務係が担当している。(業務フロー参照)

【学生セミナー・実行委員活動支援】

他専攻の教員への協力依頼や、全専攻の学生を対象とした交流会の企画等があるため、活動内容や達成目標について、センター長や学术交流事業の責任教員に共有の上、会議体で承認を得るような流れを構築する等、事務からも改善提案を行っている。

学生セミナー本番の運営自体は、業務内容に大きな変更があった以下の点以外は特に困難な問題は無かった。

【夕食懇談会】

H23 年度後学期のセミナーより夕食懇親会について会議費の支出が不可となったため、湘南国際村センターの夕食代金を学生から徴収することは困難であると判断し、学内(CPIS 棟)でのケータリングに変更した。

これにより、事務職員・実行委員・教員が会場設営、配膳、ドリンク、料理の補充、片付け等を協力して行った。夕食懇親会も企画の一部であり、参加学生・教員との交流も重要であるため、実行委員・教員は前年度と同様の業務量であるが、村センターに委託できていた業務が事務職員の方に移管された形になった。

また、ベジタリアン対応メニューについて、本学まで配達可能な飲食店は少ない上、ベジタリアンフードは基本的に割高であるため、限られた予算の中でニーズを満たすメニューを揃えることは大変困難である。

お弁当についても同様であり、H24 年度春は予算・配達面で条件を満たせる店舗が無く、湘南国際村のカフェユニオンに交渉し、特別にベジタリアン弁当を作っていただいた。

【CPIS 棟福利厚生室の利用】

音響・照明等の設備が不十分であり、講演は共通棟の講堂を利用した。また、CPIS 棟 1 階(福利厚生室)にはお手洗いが無いため、飲食をする場として適しているとは言い難い。

【感想】

平成 24 年 4 月に CPIS 事務係が発足し、事務体制も変化した。これまでも、イベントごとに打ち合わせを行ってきた。今後は週一回程度教員と事務職員のミーティングを行う等、関係するメンバー全員が情報を共有できる場を設けることで、業務の質や合理性が向上するだろう。また作業の漏れや重複等を防ぐ効果も期待できる。

「学生セミナー」に限らず、学融合推進センターにおける事業については教職員間で常に認識を共有していく必要がある。特に教育プログラムはセンターとして重要であると認識しているので、今後とも教員と協働し、継続的な発展に努めていきたいと考えている。

(資料Ⅷ 学融合推進センター事務係作成)